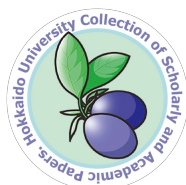




Title	第6章 アイヌの人々との接触・交流と社会関係
Author(s)	小野寺, 理佳
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 30, 81-112
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52417
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_30_6.pdf



第6章 アイヌの人々との接触・交流と社会関係

小野寺理佳 | 名寄市立大学保健福祉学部教授

第1節 はじめに

本章では新ひだか町の住民のアイヌの人々との交流関係を考察する。以下においては、大きく3つの部分に分けて検討をおこなう。はじめに、生活史におけるアイヌの人々との交流の経験を考察する。次いで、現在の生活におけるアイヌの人々との交流の実態とその内容を探る。3番目に、和人とアイヌの婚姻という新たな社会関係に着目する。婚姻を、「社交」としての交流ではなく、「家族・親族の形成」としての交流ととらえ、和人とアイヌのカップルへの眼差しを上げる。

使用するデータは、『地域住民の日常的な交流の実態とアイヌ文化・アイヌ政策に関する意識調査』と『生活の歩みとアイヌの人々との関わりについてのインタビュー調査』の回答結果である。前者の調査データからは、アイヌの人々との交流関係の全体像を、後者のインタビューデータからは、交流の具体的な形とそれらの経験のなかで形成されてきた（あるいは明らかになってきた）考え方や思い、価値観などがどのように語られるのかをおもにとらえることとする。その際、交流のありようは年代によって大きく規定されると考えられるため、3世代、すなわち、青年層（20～30代）、壮年層（40～50代）、老年層（60代～）について分析をおこなう。インタビュー内容をまとめた表については、紙幅の関係上、典型的な回答や特徴的な回答など主なものを選択して掲げることとする。

第2節 属性

検討の対象とする地域住民は524人、世代別内訳は、青年層89人（17.0%）、壮年層191人（36.5%）、老年層244人（46.6%）である。老年層がおよそ半数を占め、青年層は2割に満たないという構成比である。男女ほぼ半数ずつであり、世代毎の性別比率は表6-1のとおりである。現在の居住地は静内地区約8割、三石地区約2割であり、世代による違いはほとんどない。

ここで、出生地（表6-2）、本人来住時期（表6-3）、家の来住世代（表6-4）、世帯状況（表6-5）、教育歴（表6-6）、就労状況（表6-7）、職業（表6-8）、世帯収入（表6-9）について各世代の現状を素描する。まず、青年層は、地元（現住所あるいは新ひだか町）生まれが52.3%、地元育ちが50.6%、親の代までに地元根づいている者が66.3%（「わからない」と回答した者を除いて算出。以下同じ）であり、現在は、55.2%が「夫婦と未婚の子」という世帯構成で生活している。年長世代に比して高等教育機関への進学者が多い（49.5%）ものの、高等教育進学率（専修学校専門課程を含む）の全国平均が1994（平成6）年には6割を超え、2000（平成12）年以降は7割を超えている（平成21年版『文部科学統計要覧』就学率・進学率（2-2））状況からすれば低めの教育水準といわざるをない。大学に限っての進学率の全国平均は1994（平成6）年にはすでに30.1%に達しており、当該青年層の16.9%との間にはかなりの開きがある。とはいえ、この地において相対的に高い学歴で

あることは疑いなく、ホワイトカラー的な事務的職業従事者が他世代より多い（26.8%）。この他、専門・技術職（17.9%）、販売職（12.5%）、サービスの職業（12.5%）などに従事する。就労率89.5%のうち常雇率も相対的に高い（53.5%）。世帯収入は400万円以上に58.1%が含まれる。

次いで、壮年層は、地元生まれが60.2%、地元育ちが54.5%、親の代までに地元根づいている者73.5%で、青年層と同様に「夫婦と未婚の子」という世帯構成が最多である（40.4%）が、50代以降は子世代の独立により世帯規模は縮小する。高等教育機関進学者は青年層より少なく35.7%であるが、この進学率も全国水準（1972（昭和47）年には3割ほどであったのが、1978（昭和53）年以降約5割で推移し、1994（平成6）年には6割に達している）と比較すると低めである。就労率は青年層とそれほど変わらず86.2%、職業をみると、事務的職業従事者（16.2%）の比率が青年層よりも低く、農林水産の分野で働く比率（12.0%）は逆に青年層より高い。管理職の立場にある者が増え（6.8%）、世帯収入では400万円以上が69.0%を占め、青年層より収入水準は上昇する。

最後に、老年層は、地元生まれが45.5%、地元育ちが36.9%、親の代までに地元根づいている者は58.0%である。老年層では子どもが独立し「夫婦のみ」となった世帯が最多（54.9%）であり、この他、配偶者を亡くすなどによる「一人暮らし」（22.8%）が3世代中もっとも多いことが特徴といえる。この世代の教育歴は義務教育段階まで（33.6%）、高校まで（46.6%）が中心であり、それ以上の教育を受けた者は2割に満たず、前2世代と同じく全国水準に届かない。すでに退職した者が半数以上（56.0%）に上り、就労している場合も常雇率は1割ほど（10.8%）で、農林水産関係（23.0%）やサービスの職業（17.2%）に、パート・自営業・家業手伝いといった立場で携わるというのが主なスタイルである。退職者を多く含むため、世帯収入は他の2世代に比較すれば当然低く、半数超（52.3%）は300万円未満である。

なお、この524人の中には、血筋や婚姻関係・親子関係という点において、アイヌ社会のメンバーたる条件を備えた人々が22人含まれている。具体的には、アイヌの血筋（19人）、和人配偶者（1人）、和人養子（2人）が該当する。世代別にみると、アイヌの血筋の者は、青年層3人、壮年層3人、老年層13人、和人配偶者は壮年層に1人、和人養子は、壮年層1人と老年層1人である。彼らのアイヌとしての自己認識、アイヌ社会への親密性に関わりの程度について問うことはしていないため、アイヌの人々との交流が相対的に深まる要件をもつ人々という括りで考慮することとする（以下、アイヌ系住民と表記する）。

表6－1 世代と性別

	度数（%）		合計
	男性	女性	
青年	44(49.4)	45(50.6)	89(100.0)
壮年	91(47.6)	100(52.4)	191(100.0)
老年	115(47.1)	129(52.9)	244(100.0)
合計	250(47.7)	274(52.3)	524 (100.0)

* 不明・無回答を除く。以下、全表において同じ。

表 6－2 出生地

	度数 (%)										合計
	現住所	新ひだか町	道内	東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄	外国	
青年	21(23.9)	25(28.4)	29(33.0)	2(2.3)	4(4.5)	0(0.0)	5(5.7)	1(1.1)	1(1.1)	0(0.0)	88(100.0)
壮年	34(17.8)	81(42.4)	62(32.5)	2(1.0)	6(3.1)	1(0.5)	1(0.5)	0(0.0)	4(2.1)	0(0.0)	191(100.0)
老年	28(11.7)	81(33.8)	107(44.6)	8(3.3)	6(2.5)	0(0.0)	1(0.4)	1(0.4)	2(0.8)	6(2.5)	240(100.0)
合計	83(16.0)	187(36.0)	198(38.2)	12(2.3)	16(3.1)	1(0.2)	7(1.3)	2(0.4)	7(1.3)	6(1.2)	519(100.0)

P<.001

表 6－3 本人の来住時期

	度数 (%)		合計
	生まれてからずっと	明治・大正・昭和・平成	
青年	45(50.6)	44(49.4)	89(100.0)
壮年	103(54.5)	86(45.5)	189(100.0)
老年	90(36.9)	154(63.1)	244(100.0)
合計	238(45.6)	284(54.4)	522(100.0)

P<.01

表 6－4 家の来住世代

	度数 (%)					合計
	自分の代	親の代	祖父母	祖父母より前	わからない	
青年	27(30.3)	13(14.6)	19(21.3)	21(23.6)	9(10.1)	89(100.0)
壮年	48(25.8)	49(26.3)	51(27.4)	33(17.7)	5(2.7)	186(100.0)
老年	98(41.2)	49(20.6)	63(26.5)	23(9.7)	5(2.1)	238(100.0)
合計	173(33.7)	111(21.6)	133(25.9)	77(15.0)	19(3.7)	513(100.0)

P<.001

表 6－5 世帯状況

	度数 (%)						合計
	一人暮らし	夫婦のみ	夫婦と未婚の子	夫婦と既婚の子ども	三世帯同居	その他	
青年	13(14.9)	7(8.0)	48(55.2)	4(4.6)	10(11.5)	5(5.7)	87(100.0)
壮年	26(13.8)	47(25.0)	76(40.4)	12(6.4)	21(11.2)	6(3.2)	188(100.0)
老年	54(22.8)	130(54.9)	26(11.0)	12(5.1)	9(3.8)	6(2.5)	237(100.0)
合計	93(18.2)	184(35.9)	150(29.3)	28(5.5)	40(7.8)	17(3.3)	512(100.0)

P<.001

表 6－6 教育歴

	度数 (%)						合計
	義務教育	高校	専修学校	短大・高専	大学	その他	
青年	9(10.1)	34(38.2)	16(18.0)	13(14.6)	15(16.9)	2(2.2)	89(100.0)
壮年	20(10.5)	101(53.2)	28(14.7)	17(8.9)	23(12.1)	1(0.5)	190(100.0)
老年	80(33.6)	111(46.6)	16(6.7)	10(4.2)	18(7.6)	3(1.3)	238(100.0)
合計	109(21.1)	246(47.6)	60(11.6)	40(7.7)	56(10.8)	6(1.2)	517(100.0)

P<.001

表 6－7 就労状況

	度数 (%)								合計
	経営者・役員	常雇の 一般従業者	パート等	自営業主	家族従事者	その他	無職	学生	
青年	0(0.0)	46(53.5)	15(17.4)	4(4.7)	7(8.1)	1(1.2)	9(10.5)	4(4.7)	86(100.0)
壮年	19(10.1)	70(37.0)	42(22.2)	18(9.5)	10(5.3)	4(2.1)	26(13.8)	0(0.0)	189(100.0)
老年	16(6.9)	25(10.8)	31(13.4)	16(6.9)	13(5.6)	1(0.4)	130(56.0)	0(0.0)	232(100.0)
合計	35(6.9)	141(27.8)	88(17.4)	38(7.5)	30(5.9)	6(1.2)	165(32.5)	4(0.8)	507(100.0)

P<.001

表 6－8 職業

	度数 (%)			合計
	青年	壮年	老年	
事務的職業	15(26.8)	19(16.2)	9(10.3)	43(16.5)
保安的職業	3(5.4)	0(0.0)	1(1.1)	4(1.5)
販売的職業	7(12.5)	18(15.4)	6(6.9)	31(11.9)
技能工・生産工程	5(8.9)	9(7.7)	10(11.5)	24(9.2)
運輸・通信的職業	1(1.8)	6(5.1)	5(5.7)	12(4.6)
専門・技術的職業	10(17.9)	22(18.8)	9(10.3)	41(15.8)
管理的職業	0(0.0)	8(6.8)	5(5.7)	13(5.0)
農林水産的職業	5(8.9)	14(12.0)	20(23.0)	39(15.0)
サービスの職業	7(12.5)	18(15.4)	15(17.2)	40(15.4)
その他	3(5.4)	3(2.6)	7(8.0)	13(5.0)
合計	56(100.0)	117(100.0)	87(100.0)	260(100.0)

P<.05

表 6－9 世帯収入

	度数 (%)			合計
	青年	壮年	老年	
なし	1(1.8)	2(1.6)	4(2.6)	7(2.1)
100万円未満	0(0.0)	3(2.4)	8(5.3)	11(3.3)
100～200	5(9.1)	6(4.9)	27(17.9)	38(11.6)
200～300	9(16.4)	15(12.2)	40(26.5)	64(19.5)
300～400	8(14.5)	12(9.8)	18(11.9)	38(11.6)
400～500	5(9.1)	17(13.8)	14(9.3)	36(10.9)
500～600	8(14.5)	11(8.9)	10(6.6)	29(8.8)
600～700	5(9.1)	18(14.6)	10(6.6)	33(10.0)
700～800	5(9.1)	15(12.2)	6(4.0)	26(7.9)
800～900	2(3.6)	4(3.3)	1(0.7)	7(2.1)
900～1000	2(3.6)	1(0.8)	4(2.6)	7(2.1)
1000～1500	4(7.3)	10(8.1)	5(3.3)	19(5.8)
1500～	1(1.8)	9(7.3)	4(2.6)	14(4.3)
合計	55(100.0)	123(100.0)	151(100.0)	329(100.0)

P<.01

第3節 生活史における交流

『地域住民の日常的な交流の実態とアイヌ文化・アイヌ政策に関する意識調査』には、生活史におけるアイヌの人々との交流経験を直接問う質問が置かれていないため、交流のきっかけとしてのアイヌ文化との接触経験に注目する。そのうえで、インタビュー調査への回答から、アイヌ文化との接触経験も含めて、どのような経緯でアイヌの人々との出会いがあり、どのような関係が結ばれたのかをみていくこととする。

第1項 交流のきっかけとしてのアイヌ文化との接触経験

アイヌ文化との接触経験には2通りある。1つは「現場での体験・見聞」であり、もう1つは「知識として学んだ経験」である。以下においては、この2つの経験についてみていく。

まず、アイヌ文化を現場で体験あるいは見聞した経験について考察する。2つの接触経験のうち、アイヌの人々との直接的な交流のきっかけとなるものがあるとするれば、それはおもにこちらであろう。回答結果をみると、体験したことがある者は全体としては2割を下回る。この低調な数値をふまえて世代差を確認すると、この数値は世代が上がるほど高く、老年層（24.7%）の体験率は青年層（6.1%）の4倍に達する（表6-10）。さらに、世代による違いは体験した文化の内容にも表れている（表6-11）。すなわち、青年層においては歌・踊り（100%）、アイヌ語（40.0%）、工芸（20%）といった芸能、美術工芸、語学が中心であるのに対して、老年層ではカムイノミ（44.2%）や伝統的な婚礼（20.9%）・葬儀（20.9%）などの宗教的・伝統的行事も多く含まれる点である。壮年層は、青年層と老年層の中間的な傾向をもつ。

このように、世代によって体験・見聞の量と内容が異なるのは、そもそも生活圏において日常におこなわれていたアイヌ文化の量と内容が異なっているからである。老年層の幼年時代には、アイヌ部落と呼ばれる地区があり、入れ墨をしたアイヌ女性と行き交うことも珍しいことではなく、アイヌの人々の宗教的儀式や伝統的行事を見聞きすることも日常的であった。しかしながら、日々の生活のなかでそうした特別の場所や光景を目にする機会が次第に減っていけば、若い世代になるほど、たとえば入れ墨のような「一見してアイヌ文化とわかるものを身にまとう人々」に出会うことなく、ましてや、アイヌの伝統的・宗教的な行事にふれることなく育つことになる。若い世代にとってのアイヌ文化は、むしろアートや語学という非日常的な興味関心の対象として「求めて体験される」ものとなっていると思われ、生活のなかでの自然発生的な交流のきっかけとなる体験をする機会は相対的に少ない状況に置かれてきたといえる。

次に、アイヌ文化との接触経験のもう1つ、すなわち、アイヌ文化を知識として学んだ経験についてみる。この場合は、「何を学んだか」ではなく、「誰から学んだか」に注目する必要がある。教わる相手がアイヌの人々であったならば、そこに何らかの交流が生まれる可能性があったと考えることができるからである。そこで、アイヌ文化についての知識が獲得された経緯について、世代毎に上位3つを取り出してみると、「施設や展示物」(青年層63.3%、壮年層47.7%、老年層47.1%)と「情報メディア」(青年層40.5%、壮年層40.9%、老年層30.1%)は3世代共通であるが、3つ目についてはまったく異なる（表6-12）。青年層では、「学校の授業や行事」(48.6%)、壮年層および老年層では、「アイヌ文化の団体」(壮年層27.3%、老年層27.9%)という結果である。すなわち、アイヌ文化を知識として学ぶ場として近年その有効性をもっとも発揮しつつあるのは学校だといえるのであり、青年層は、知識を獲得するプロセスにおいても、アイヌの人々と出会う機会が相対的に少ない環境にあるといえる。

それに対して、壮年層・老年層においては、上記「アイヌ文化の団体」に加え、近所の人や友人など身近な人々を通してアイヌ文化に触れたとの回答が青年層に比較して多い。具体的には、「子どもの頃からアイヌ部落があり、同級生もおり、お歯黒やヘカチ、メノコ等、色々聞いていた」「職場」「地元のお祭り」(以上、壮年層)、「町職員としての立場から参加」「クラスメートにいた」「シャクシャイン祭り」「仕事上、案内を受けて参加した」(以上、老年層)といった回答がみられる。日々の生活のなかでアイヌの人々の様子を見聞きし、彼らがおこなう行事に参加する機会があれば、また、職務として

参加する機会があれば、そうした体験の際に傍らにいる人々が教師となり、理解の仕方や振る舞い方を教えることになったであろう。

このアイヌ文化の体験の有無における世代の特徴、すなわち、老年層において相対的に体験率が高く青年層において低いという全体の傾向はアイヌ系住民に関しても同じであるが、アイヌ系住民についてみると青年層の体験率はゼロであり、世代間の差はさらに拡大する（表6-13）。このことは、若い世代においてはすでに家庭文化がアイヌ文化を伝える場になっていないこと、さらには、アイヌの人々とのつながりもまた希薄であることを示唆するものである。

以上、交流のきっかけとしてのアイヌ文化との接触経験を世代毎に整理すると次の3点となろう。1点目は、老年層は、日常生活のなかでアイヌの人々で行き交い、彼らが自身のためにおこなっている宗教的儀式・伝統的行事を見聞きする経験をし、周囲からそれについての知識を得ていったといえること。つまり、彼らにとってアイヌの存在は肌で感じられるものであり、交流の契機は生活の中に豊かに存在したと考えられることである。2点目は、世代が若くなると、日常生活においてアイヌの人々を見かけたり、儀式や行事を体験・見聞したりする機会は少なく、彼らは、アイヌの人々との自然発生的な交流のきっかけが相対的に少ない状況に置かれてきたこと。3点目は、アイヌ系住民に限って言えば、アイヌ文化の体験の有無にみる世代格差は大きく、とくに若い世代においては、アイヌの血筋であることがアイヌの人々との交流をもつことにつながるとはいいがたいことである。

表6-10 アイヌ文化の体験の有無

	度数 (%)		合計
	体験・参加したこと有	体験・参加したこと無	
青年	5(6.1)	77(93.9)	82(100.0)
壮年	26(15.2)	145(84.8)	171(100.0)
老年	44(24.7)	134(75.3)	178(100.0)
合計	75(17.4)	356(82.6)	431(100.0)

P<.01

表6-11 体験したことがあるアイヌ文化（複数回答）

	度数（応答者数の%）			合計（合計数の%）
	青年	壮年	老年	
カムイノミ	0(0.0)	12(46.2)	19(44.2)	31(41.9)
伝統的な婚礼	0(0.0)	0(0.0)	9(20.9)	9(12.2)
伝統的な葬儀	0(0.0)	2(7.7)	9(20.9)	11(14.9)
イナウ	0(0.0)	2(7.7)	5(11.6)	7(9.5)
神聖な場所	0(0.0)	1(3.8)	5(11.6)	6(8.1)
タブー	0(0.0)	2(7.7)	3(7.0)	5(6.8)
まじない	0(0.0)	0(0.0)	1(2.3)	1(1.4)
夢見	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
アイヌ語	2(40.0)	5(19.2)	4(9.3)	11(14.9)
ユカラ	0(0.0)	5(19.2)	5(11.6)	10(13.5)
歌と踊り	5(100.0)	16(61.5)	13(30.2)	34(45.9)
工芸	1(20.0)	5(19.2)	8(18.6)	14(18.9)
伝統的狩猟	0(0.0)	3(11.5)	3(7.0)	6(8.1)
料理	0(0.0)	5(19.2)	9(20.9)	14(18.9)
その他	0(0.0)	1(3.8)	1(2.3)	2(2.7)
合計（合計数の%）	5(6.8)	26(35.1)	43(58.1)	74(100.0)

表6-12 アイヌ文化を何を通して知ったか（複数回答）

	度数（応答者数の%）								合計 (合計数の%)
	家族や親戚	近所の人	友人	学校の授業 や行事	アイヌ文化 の団体	情報メディア	施設や展示物	その他	
青年	5(13.5)	4(10.8)	4(10.8)	18(48.6)	5(13.5)	15(40.5)	23(63.3)	0(0.0)	37(14.2)
壮年	9(10.2)	9(10.2)	12(13.6)	10(11.4)	24(27.3)	36(40.9)	42(47.7)	6(6.8)	88(33.7)
老年	18(13.2)	29(21.3)	27(19.9)	4(2.9)	38(27.9)	41(30.1)	64(47.1)	5(3.7)	136(52.1)
合計 (合計数の%)	32(12.3)	42(16.1)	43(16.5)	32(12.3)	67(25.7)	92(35.2)	129(49.4)	11(4.2)	261(100.0)

表6-13 アイヌ文化の体験の有無（アイヌ性別）

		度数（%）		合計
		体験・参加したこと有	体験・参加したこと無	
青年	和人	5(6.3)	74(93.7)	79(100.0)
	アイヌ	0(0.0)	3(100.0)	3(100.0)
壮年	和人	25(14.9)	143(85.1)	168(100.0)
	アイヌ	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
	和人配偶者	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)
	和人養子	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)
老年	和人	41(24.1)	129(75.9)	170(100.0)
	アイヌ	3(37.5)	5(62.5)	8(100.0)

* 3重クロス表については有意確率は記載しない。以下、同じ。

第2項 アイヌの人々との出会い

続いて、インタビューデータをもとに、これまでの生活、とくに子どもの頃におけるアイヌの人々との交流がどのように語られるのかをみていく。順番としては、交流のきっかけとしてのアイヌ文化との接触経験について整理してから、アイヌの人々との交流経験、交流にまつわる思いや意識を考察する。

まず、アイヌ文化との接触経験についてみる。とくに子どもの頃に関して、アイヌの文化的行事や慣習がおこなわれている様子を見聞した経験を問うと、入れ墨をしている人を見たという経験をあげる者がもっとも多い（表6-14）。「口のまわり、何でなのか、どうしてこんなのするのかないと思いました。子どもの頃、こういうおばあちゃんがいるのをよく見たことがありましたね」（壮年女性）、「もうとなり近所にいたよね。わかる？昔ね、こう入れ墨していた人」（老年女性）、「（入れ墨は）結婚しているという意味。あれは見たことがありますね」（壮年男性）というように、壮年層や老年層の幼い時期においては、入れ墨をした女性を見かけることは当たり前の光景であったことがうかがわれる。この他、イナウ（壮年男性）、チセ（壮年男性）、田植えや稲刈りのときに神に祈る（老年女性）といったことがあげられている。このように日常生活のなかでアイヌの人々を見かける機会が少なからずある環境では、実際の交流の機会も相対的に多かったと思われる。そこで、子どもの頃のアイヌの人々との実際の交流を確認すると、その交流場面は大きく分けて2つあることがわかる。ひとつは生活の場面（表6-15）であり、もう1つは学校の場面（表6-16）である。

1つ目、生活の場面についてみると、家族ぐるみあるいは親同士の付き合いに連なる形での出会いと交流をあげる者が多い。近所の遊び友達というだけでなく、いわゆるお隣さん同士の日常的な助け合いのなかで、食べ物を分けてもらう（「魚をもらったり。漁師をやっていたから。何でもよく

わからなかったけど、ただ食べ物をもらったり、そうですね。仲良くしていたほうだと思います)(壮年女性))、農作業や水産加工を手伝いに行く(「私達もむこう田植えだとか稲刈りに手伝いにいくようになって、秋にするめ取れるようになる」とむこうでイカのするめを作るのを手伝いに行ったり、そういうお付き合いはずっとしていたんですよ)(老年女性))、お守りをしてもらう(「親たちが忙しいものですから、私を親たちがエカシに預けて、仕事に出て行くわけです)(老年男性))という経験をしている。

したがって、子どもの意志というよりは親のライフスタイルや意向でもたらされた交流といってよい。子どもとしてはいつの間にか交流関係のなかに巻き込まれていたものであり、「どうしてあすこの家とお付き合いするの)(老年女性)と親に聞くのであるが、「田植ったら「行きなさい」。稲刈りったら「行きなさい」と言われるままである。このように、アイヌの人々との交流が開始・維持されるかどうかは親の意識に大きく左右され、親に従い、親の姿勢に倣う形で子どもはアイヌとの交流の仕方を身につけていったということができる。そのなかでも、とくに、親がアイヌの人々との関係をどう表現するかということは、子どもにとっては彼らとの距離感が定められるうえで大きな影響があったと思われる。たとえば、ある老年女性は、「(父の)友だちがアイヌの酋長の息子だと言っていましたけどね。私が小さい時にそういう話をしていました。私自身はわからないんですけど、ただあの人は友だちなんだって。アイヌの酋長の息子って」と、父親の言葉を印象深く受けとめた経験を語るのである。

しかしながら、彼らは、特定のアイヌの人々との交流をもつ一方で、親あるいは周囲の人々のなかにアイヌへの差別的感情があることにも気づいている。「たしかに仲良くはしていましたけれど、やっぱりアイヌ民族と和人の関係が、やっぱり、ちょっと両親からも言われていましたのでね)(壮年男性)、「親は年をとっているから、わかってたんでしょうね、子どもよりは。アイヌという偏見はけっこうあったみたい。陰ではなんか言っていたような気がするんですよ)(壮年女性)、「(アイヌの子と和人の子が仲良くないということは)いや、そうでもなかったですけど。でもやっぱり、遊んでいるとね、やっぱり辺りの人がすごい言い方をして、何でこんな差別するのかと思うこともけっこうありましたけどね。自分たちはそういうあれが全然なかったですから。あの、浜って、浜の人ってとくにうるさい。すごく人種差別をする。そして、言葉がきたないでしょ)(老年女性)などの発言がある。

2つめ、学校の場合における交流経験を取り出してみると、アイヌの子どもがクラスに占める割合によってはその存在に多少の違和感をもつ者もいたようであるが(「学校へ行っても「いや、どうして」っていう感じのこともありましたよ。まずクラスで45人いるうちの10人くらいはいたこともありましたからね)(老年女性))、クラス運営において差別的なことがおこなわれたとの指摘はなく、クラスメートとして普通に交流していたというのが共通する回答である。この場合、インタビュー回答者の念頭にあるのは主に小学校段階であったと推察され、親密度は異なるにせよ、子ども同士の関係としてごく一般的なものであったとの印象に落ち着いているように思われる。

もっとも、学校においても、当時の彼らがアイヌの人々に対して何の違いも感じないでいたわけではなく、「小さい頃は母親から「あんまり遊ぶんでないよ」と言われたことはありましたけどね)(壮年男性)と語るように、大人の側の差別的な雰囲気を感じていた者もあれば、アイヌのクラスメートの不登校問題に関わってクラス全体で話し合い、「みんな順番、順番で担当を決めて、今日はあんたたちが迎えに行く番、今日はあんたたちが迎えに行く番)(壮年女性)といった助け合いをするなか

で、アイヌの人々へのいじめや家庭問題の存在を知ることになった者もいる。「ただですね。つねになんか認識はしていましたが。あの方はアイヌの人、私達は違うという認識は多分、その地区に住んでいたすべての人はもっていたと思います。だからといって、悪口を言うとか、仲良くしないとかということはそういうことは一切なく、違うという認識はつねに頭のなかにありましたね」(老年女性)という言葉が、この「あからさまな差別ではないが異質な存在としてつねに意識される」という状況をよく言い表している。生活場面での交流に比べると、学校での交流は、クラスメートとしての主体的な関わりも多かったという意味で、アイヌという存在について自ら考える契機ともなったように見受けられる。

さて、これらアイヌの人々との交流経験について、アイヌ系住民(老年男性3人)はどのように語っているのだろうか。この3人のうち、2人は子どもの頃から自分がアイヌであることを知っていた者であり、1人は25,6歳の時に曾祖母がアイヌであることを知らされた者である。子どもの頃のアイヌ社会との距離は三人三様で、前二者は、差別を受けた当事者として語りながらも、一方は親からアイヌ文化について詳しく教えられた(「自分は長男なので、父の手伝いをさせられた」と語り、もう一方は親がアイヌ文化を教えてくれなかった(「母は強烈な差別を受けていた。それで自分にはまったくアイヌの言葉、伝統、文化を教えてくれなかった」と語る。これに対して、後者は、「アイヌの人たちと普通につきあいはあったけれど、特別アイヌの習慣にふれたことはない」、「自分自身は、アイヌの子をバカにするような差別感はなく、違う人がいるのだなというふうに思っていた」と述べている。「アイヌの人たち」「アイヌの子」という表現には、自分とアイヌの人々との間に境界線を引き、自分は「こちら側」の人間であるとの思いや主張がみえる。彼は自分のアイヌの血について知った時、「特別何か感じることもなかったし、昔のことだから、ありうると思った」と述べるものの、和人サイドの人間であるとの立場は揺らいでいないように見受けられる。

アイヌに対する差別については、彼らはそれに気づいていたことを認めている。「アイヌ民族以外との関わりではみんながみんなではないけれど、差別されたという雰囲気はあった」(老年男性)、「大人の中にはアイヌを蔑視するような雰囲気はあった(「きたない」とか「臭い」など)」(老年男性)と述べるように、あからさまな差別とはいえないまでも何か違った空気があることを子どもながらに感じ取っている。学校生活についても、「アイヌの血が混じっていても自分はアイヌではないというふうに言う子どもはいた」(老年男性)と述べており、アイヌの子どもにとっての学校は用心深さを要する場所であったと考えられる。

注目されるのは、和人中心の地域社会で生きるための姿勢である。父親から様々な儀式のやり方を教えられてきたと語る老年男性でさえ、「アイヌというよりは、一地域住民として、人間という立場に立つとみんな同じだと思っている。アイヌというよりは人間としての道を踏み外さないことが大事」と語り、自身が地域住民としての立場を重視してきたことを強調する。これらの姿勢が、結果として、地域のなかに居場所を確保するための方策として働いてきたということだと思われる。

以上、生活史におけるアイヌ文化やアイヌの人々との接触・交流の経験については3点にまとめられるだろう。1点目は、とりわけ老年層にとっては、日常風景のなかでアイヌの人々を見かける機会が少なからずある環境で育ち、実際の交流の機会も相対的に多かったと思われること。2点目は、壮年・老年層が子どもの頃、彼らは、親同士が交流するなかで相対的に多くの交流を経験したこと。その際、

周囲の大人社会にアイヌ差別が存在することを薄々感じながらも、自身が意図的にアイヌ差別をすることはなかったと認識していること。3点目は、アイヌ系住民のアイデンティティのありようとそこに基盤をおくアイヌへの視線は多様なものでありながら、それぞれが地域社会で生きるためのアイヌとしての身の処し方をもっていていると思われることである。

では、これらの接触・交流の体験を経て、現在の生活における住民とアイヌの人々との交流はどういったものになっているのだろうか。

表6-14 子どもの頃見聞きしたアイヌ文化

		●は和人住民 ■はアイヌ系住民
壮年	男性	●入れ墨している人もいたし、チセはなかった。イナウはあったかな。小さい頃だから、それくらいかな。(入れ墨をしている人は)今はもういないですね。僕らの小さい頃だから40年前くらいはまだいましたけどね。イナウはありますよ。けっこう。この自治会50戸くらいありますからね。そのうちアイヌ民族の人が10軒くらいありますので。 ●(入れ墨は)結婚しているという意味。あれは見たことありますね。…だからもうアイヌの人は貧乏だから。…僕小学校の時に、親じゃなくて近所の年上の人にそっちに行くと言われたことあるね。行くと言われると子どもだから行きたくないからさ、3、4人で見に行くと、記憶にあるのが、町道とか道路は変わらないんだけど、ロープが張ってあって、ベニヤ板にマジックか墨で、〇〇部落と書いてあるのが置いてある。そこから風が吹くと何か匂いが違うというか、おっかないっていうか、そういえば、かすか目の奥に何かチセというか三角のチセとかあったような気がしないでもないね。小学校2年とか3年生の時の記憶だけ。
	女性	●ないんだよね。それが。あったかな。記憶にないね。全然。あ、これは知ってる。入れ墨をした人は見たことがありますね。口のまわり。何でなのか、どうしてこんなのかなど思いました。子どもの頃、こういうおばあちゃんがいるのをよく見たことがありますね。あと、わからないですね。入れ墨くらいですね。 ●子どもの頃は入れ墨している人はたくさんいました。おばあちゃん達はみんなこういうふうにして、ちゃんと口に入れ墨していました。していましたね。見ました。お友達のおばあちゃんがしてたんですね。小学校の時、入れ墨。
老年	男性	■アイヌ文化、アイヌ語に囲まれて育った。父はお酒がコップ一杯でも手に入るとストーブのふちを開けて、神々や仏に感謝お礼をして、村の安全、家庭安全、子供達の健やかな成長を祈る。その時に自分は長男なので、父の手伝いをさせられた。…母は幸い入れ墨をされていなかったが、母の姉や父の姉妹は入れ墨を入れていた。祖母も入れ墨をしていた。 ■子どもの頃、祖母世代で入れ墨をしている人が近所にたくさんいた。知り合いのおばあさんも入れ墨をしていた。母親の世代には入れ墨をしている人はいなくなった。漆器は家にあり、見たことがあった。イナウも見たことがある。先祖供養も見ることがある。カムイノミは見たことがあるけれど参加しようという気にはならないし、参加したことはない。これからもかわろうとは思わない。そういうふうになってしまった。母は強烈な差別を受けていた。それで自分には全くアイヌの言葉、伝統、文化を教えてくれなかった。 ●アイヌは学校には同級生がいましたね。部落、部落があるからね。そこには入れ墨をした人はいましたよ。入れ墨はありますね、既婚者ね。あとは、その頃は交通機関も発達していないから、そういう所まで、あんまり歩いて行かなければならないから。そんなに部落行かないし。 ■祖父母の代でも全くアイヌの伝統文化はやっていなかった。近所にアイヌはたくさんいた。入れ墨をしている人もたくさんいた。チセを見たことがある。アイヌの人たちと普通につきあいはあったけれど、特別アイヌの習慣にふれたことはない。 ●入れ墨した人は見たけど。何のために、何だかわからなかったな。…こっちの下の方にいた。おばあちゃんね。もう亡くなったけど。これ、子どもの時か。えりもにはいない。ここに来てから、〇〇に来てからいる。何だべと思ったわ。えりもにはいないんだわ。アイヌの人。子どもの時のアイヌはあんまりわからないんだわ。 ●ほとんどなかったですね。日高町の場合はいなかったですね。 ●シヌエ(入れ墨)やニンカリ、これらも見ることがございます。私もシヌエをしたメノコの写真は持っていますけど。私の親の年代くらいの方でございましょう。(近所にたくさんいた?)はい、多かったです。(近所でアイヌ語が話される場面は)ええ、自然にね。やっぱり、私達の親がそういう言葉を使いました。ですから、それを聞き覚えというんでしょうか。そういう部分もありましたね。 ●入れ墨を口のまわりにしている女の人は見たことはありましたね。耳輪をしている人は見たことがないです。よく親たちの話では仕事をやってたから、アイヌの人がいるからね。だから、アイヌという言葉は聞いたことはあっても、子どもですからね。
	女性	●近くには住んでいなかったんですけど。この辺ではね。〇〇という所にはそういう人達は多かったんですよ。そこではやっぱり、田植えだとか稲刈りに行ったら、我々がやっていないようなことをやるね。仕方ないんだ。そういう人達のしきたりだからと親がよく言っているのは聞いたんですけど。それ自体はこの辺でやっているのって見たことないですね。(田植えや稲刈りの時に何か神様にお祈りしているというようなことを見たことは)ある。…まず、目のふちと入れ墨がすごかったんですよ。そういう関係で、そうだね。まず入れ墨の人が多かったですね。女の人はほとんど全部。今は見れないですけどね。 ●いや。いないね。〇〇はいなかったね。だけどね。〇〇(小学校から…注)はもうとなり近所にいたよね。わかる?昔ね、こう入れ墨していた人。それから、荷物持つのにここにかけて。そうやって歩いている人。うちの隣のおばあさんも何人かいますよ。(他に見かけたアイヌ文化は)いや、ちょっとわからないね。 ●そのことについては全くふれませんでしたね。ただ、多分、その頃からどこなのかしら、〇〇とか、儀式がありますよね。そういうのがアイヌの人達の間であったというのは聞いたことがあります。(直接見聞きしたことは)私はありませんね。(入れ墨をしている人は)近所にはいなかったんですけど、バスで通学の時に見たことはあります。高校生ぐらいの時ですね。〇〇から静内の高校に通う時ですね。 ●(入れ墨をしている人は)それはありました。参観日でも、した人来ていましたから。お母さんが。 ●その方入れ墨入っていたのね。同級じゃなくて。けっこうなお年寄りの方だったんですけど、すごく懇意にしていって。ここには入っている。手にも入っている。女の方でね。ちょっと、しょっちゅう来るもんですから、私がたにすると見たことないものですから。私の上に兄が、3つ違いかな、いて、畑の手伝いに来て一緒にやっていると、私達はその方に「おっか、おっか」と言っていたんですけど。口に入れ墨があって、すごいきれいな方で、和人ですものね、って言ったら失礼だけど。もらわれていって、入れられた。気がついたらこうだったと言って。「どうして、おっかあ、口が黒くなっている」とか、「手になんでそうやって」って。でも、その方は嫌がらないで、いろいろなお話してくれましたね。「私はこうやって、もらわれていって、すぐね、いくつぐらいて言ったかな。)入れ墨を入れられて育てられたんだよ」という話で。ですから、あんまり違

		和感なく、特別、アイヌだからどうか、というのは私はなかったですね。…儀式はないですけど。白で何かこうやって昔つくのありますよね。きびだとか何とか。それはね、見ています。歌いながらこうやって、独特のあれですよね。あれでこうやって。あります。歌ってこうやってやるの。…カムイノミがこうだよとか、実際にやったのは見たことないですけども、こうやるんだよとか。こうやってやるんだよとか。それから、衣裳を見せてもらったこともあります。すごいですよね。あの衣裳。着て見せてもらったり。こうやって、飾りを首からかけたりとか。
--	--	--

表6-15 子どもの頃のアイヌの人々との交流・当時の自分のアイヌの人々への態度・周囲の人々のアイヌの人々への態度

		●は和人住民 ■はアイヌ系住民
壮年	男性	●（交流は）あった。どっちかというと一緒に遊んでいた程度ですからね。子どもの頃ですから、喧嘩をしたりもしましたけど、それなりにつきあっていましたね。（印象に残っているのは）やっぱり、小学校の頃かな、アイヌの人の家に遊びに行ったことがあったよね。その時にはやっぱり、今あんまり覚えていないけど、宝剣とか、漆器類があったのは記憶にありますね。その時代でしたから、確かに仲良くはしていましたが、やっぱりアイヌ民族と和人の関係が、やっぱり、ちょっと両親からも言われていたものでね。その中で、遊びに行った時に、そういうのがあったなというふうに頭の中には残っていますね。（和人との付き合いとの違いはあったか）そうですね。 ●普通に遊んでいましたよ。
	女性	●仲良くですね。私は山のほうに住んでいましたが、下のほうの海側に～さんという人が住んでいたんだけど、とても明るくて足の早い人で、その人とけっこう付き合っていたり、広く浅く。魚をもらったり。漁師をやっていたから。何でかよくわからなかったけど、ただ食べ物をもらったり、そうですね。仲良くしていたほうだと思います。親もそうですね。なんぼか。魚を持ってきてくれたりして、普通に接していました。でも、親は年をとっているから、わかってたんでしょね、子どもよりは。アイヌという偏見はけっこうあったみたい。陰ではなんか言っていたような気がするんですよね。
老年	男性	■子どもの頃の交流ではとくにアイヌ民族だからということは子どもだからなかった。そういう交流は大人同士がやっていた。親は友達同士で交流があったと思う。アイヌ民族以外との関わりではみんながみんなではないけれど、差別されたという雰囲気はあった。青年時代もずっとあったし、そういう扱いは受けて来た。アイヌに対して差別意識をもつ人はいた。 ■子どもの頃から親や近所の大人など周りを見ていて、自分がアイヌであることに気づいていた。親や近所のアイヌ民族は何かあれば行ったり来たりしていたから、何故だとは思っていた。 ■近くにコタンがなかったから、純粹のアイヌはまわりにはいなかったが、ハーフやクォーターで目が大きくて彫りが深く、アイヌの血が入っている子どもはいた。自分自身は、アイヌの子をバカにするような差別感はなく、違う人がいるのだなというふうに思っていた。アイヌと和人の子どもが喧嘩したりする場面は見たことがない。アイヌだからいじめられるということとはなかった。大人の中にはアイヌを蔑視するような雰囲気はあった（「きたない」とか「臭い」など）。 ●ただ私の記憶にありますのが、〇〇にいた時には私もまだ3歳か4歳かと思いますが、三角の小さいチセ、家、廊下があって、そこに爺ちゃん、エカシですね。親たちが忙しいものですから、私を親たちがエカシに預けて、仕事に出て行くわけですが、その時の爺さんの名前は親から聞いています。ヤキネクルという名前でした。結局、オンネクル（年寄り）、おわかりだと思いがちですがお年寄りなものですから、そこに住んでいて仕事も何もしていない。せいぜい子どものお守りぐらいで。ここに抱かされた記憶があるんですが、どうも髭が邪魔だったという記憶があります。
	女性	●うちが借家をやっていた時に、そこで〇〇に住んでいましたから、そして、（家を貸していたアイヌの人は）ある程度親が年齢になってきて、〇〇に帰って一緒に暮らすようになって、こっちにいないから私達もむこう田植えだと稲刈りに手伝いにいくようになって、秋にするめ取れるようになるとむこうでイカのするめを作るのを手伝いに行ったり、そういうお付き合いはずっとしていたんですね。私が、「どうしてあすこの家とお付き合いするの」と聞いたんですって。結局小さい頃、一緒に借家に住んでいたのを知らなかったのね。「どうして、何かあったらあすこにもって行きなさい」と言われるのかな。田植ったら「行きなさい」。稲刈りしたら「行きなさい」。そうしたら、親からこういうわけで、あすこずっと2軒借家だったんだ。アイヌの人たちが新婚時代に、ずっと入っていて、親が年齢になったので向こうへ行って田んぼを作ったりするようになったんだって。それを聞いたんですよ。あまりにも何か一緒にいなくても、行き来をしていたもんですから。で、自分の母親はここの人じゃないですから。父親はここで多分生まれ育っていますが、母親は〇〇から来ているものですからね。…仲良くつきあっていたこともあるし、喧嘩もして、やっぱり喧嘩もして行ったり来たりしないこともあったし。（アイヌの子と和人の子が仲良くないということは）いや、そうでもなかったですけど。でもやっぱり、遊んでいるとね、やっぱり辺りの人がすごい言い方をして、何でもこんな差別するのかと思うこともけっこうありましたけど。自分たちはそういうあれが全然なかったですから。あの、浜って、浜の人ってとくにうるさい。すごく人種差別をする。そして、言葉がきたないでしょ。（和人の子との付き合い方とアイヌの子との付き合い方が違うということは）別にそんな。同じ。 ●（18歳まで住んでいた〇〇にアイヌの人々は）いました。〇〇という地区の奥に〇〇という地区があるんです。父が小さい時にはアイヌ部落があったんですね。（印象に残っていることは）父の友達が同じ年代ですの、今はもう生きていれば90何歳くらいですけど、その友達がアイヌの酋長の息子だと言っていましたけど。私が小さい時にそういう話をしていました。私自身はわからないんですけど、ただあの人は友達なんだって。アイヌの酋長の息子って。昔はそういうアイヌ部落というのがあって、そういうのが、今の〇〇がそうですね。もう皆さんあたりまえのごとく〇〇という地区はあそこはアイヌ部落、そして〇〇の人達も自分たちでそう思っていますよね。だからそれと多分同じ感覚だと思います。 ●（アイヌの人々とのつきあいは）ありましたね。私というより、親たちがこうあったものですから、出入りもありましたからね。しょっちゅう来るし、私がたも行っていたし。あんまり、だからアイヌだからというのはないですよ、私としては。そういうお付き合いはしていましたね。いじめた記憶もないし。

表6-16 学校時代のアイヌの人々との関わり・クラスメートとしてのアイヌの人々

		●は和人住民 ■はアイヌ系住民
壮年	男性	●母はよく言うんだけど、あまりアイヌに対しては良く思っていなかったような感じは受けましたけどね。小さい頃は母親から「あんまり遊ぶんでないよ」と言われたことはありましたけどね。ただ、僕らの小学校中学校時代は子どもの数が多かったから、1クラスに50人ぐらいいましたから、その中には1割まではいませんけど、5人程度はいたかな、やっぱりそれなりに付き合いましたけどね。…中学生の時は50人クラスの中に5人くらい、高校行くと1人か2人くらい。やっぱりね、アイヌの人は当時、なかなか高校には行けなかったよね。アイヌの人といっても和人とアイヌの人が結婚している人がけっこういますよね。そういう人はだいたい高校に来ていましたよね。ただやっぱり両親が両方アイヌの人というのは、なかなか学校には上がって来なかったような気がしますね。全部が全部というわけではないけど。一概には言えないと思いますね。僕の知っている人で奥さんがアイヌで旦那さんがシャモで、逆の場合もありますからね。それはあまり関係ないですね。 ●アイヌはクラス50人学級だったらだいたい10人か15人くらいいたんじゃない。…クラスメートね。だからって、よく喧嘩したとか、いじめたとか、いじめられたではなく。普通に気が合うのは仲良くしたし。話をしたことないのは話をしないし。アイヌの人だから特別どうのこうのということではなかった。…特別エピソードはないです。(クラスでのいじめとかは)ないですね。差別的な行為はあったんでしょうけどね。まあ、区別というかね、相手にすれば差別なんでしょうけど。
	女性	●小学校からなんだけど。アイヌ部落っていうか、アイヌじゃない人もいるんだけど、アイヌが住む土地が決められていたの。そこに住んでいた同級生がいて、途中から学校に来なくなったの。家庭的なことなのか、学校でいじめられたからなのか。かなり濃い。みんなから軽視されていたのかわからないけど、私はそういうのも疎いから。いじめられたのか、家庭的にお父さんが飲んでいて嫌だったのか、学校に来たくなかったのかということで、学校の中でけっこう話し合ったことがあった。どうやって学校に連れてきたらいいのか。そういう問題があったことがあった。みんな順番、順番で担当を決めて、今日はあんたたちが迎えに行く番、今日はあんたたちが迎えに行く番。という、昔って、すごい、そういうのがあったんですよ。人を助けるというか、そういうのがあったの。みんなでなんとか学校へ連れて来ような、みたいな感じで。みんなで助けようみたいな感じで。でもやっぱり、学校に来なくて。何かがあるんだろうね。子どもだからわからないから。ただ行こうって誘うだけで、空振り。出てこないんだよね。結局、最終的に中学校には来ていたけれどね。中学校では来るようになっていて。でも、けっこう休みがちだったね。 ●変な言い方ですけども、本当のアイヌの人達同士で結婚した純粋のアイヌの人達というのは多分何人かはいなかったと思うけど、何代か過ぎている人はもうたくさんいたと思います。多分3分の1くらいはいたと思います。…全然関係なく、ですね。嫌いな人は嫌いだっただろうけど。今みたいにいじめって、露骨にない時代から。小学校の時は本当に純粋にアイヌという人は多分何人かいたと思うんです。そういう人達は何かあんまり仲良くした、うーん、でも私は全然関係なくお付き合いしたから、わからないんだよね。…家にも遊びに行きましたし。だから全然。親に止められたこともなかったから。結婚する時は、言われたから、何か差別はあったんだと思うけど、私がこう友達同士でつきあうのには言われたことはないです、親からはだめと。…やはり、先生にもよるんでしょうね。私達の小学校の時の先生は厳しかったです。仲間はずれは許されなかったから。だから、そういうのもあったんだろうなって。でも、こんなことを言っているのか、でも、すごいアイヌの人達はだらしがないという印象は私のなかにありますね。なんか、貧しさに負けているというのか、何というのか。お金なくて修学旅行も行けないお友達が、お父さんお酒飲んでべろべろになっているとか。そういうのなんかいっぱい見て、そういうのがあって、なんかすごいだらしがないという印象はすごいありましたね。子どもの頃は。
老年	男性	■小学校時代はみんながみんなではないけれど差別はあった(青年時代もあった)。小学校時代は多少の思い出はあるけれど、楽しい思い出はない。差別を受けて死んでも忘れられないようなつらいこともあった。小学2年生の時に小学1年生の女の子が玄関のガラスに触って割ってしまった。すると、その子が「あいつ(自分)に突き飛ばされた」と言った。上級生につままれて職員室に連れて行かれた。先生にまず「挨拶が悪い」とパチーンと叩かれ、踏んだり蹴ったり暴力を振るわれた。 ■学校時代にとくににつらかった記憶はない。母の時代に差別はあったが自分の頃にはなかった。中学校の時に朝鮮系の人がいて(5人まではいなかったと思う)、その人達がかなりいじめられたり、差別を受けたりしていた。アイヌが差別を受けていたということではなかった。 ■友達のなかにはアイヌはいた。アイヌと見た目でわかった子どもはいたが、その頃は隠そうという雰囲気があった。アイヌの血が混じっていても自分はアイヌではないというふうに言う子どもはいた。隠しているとアイヌだとわからない子どももいたと思う。アイヌだけが入学する小学校があった(自分の頃はもうなかったかもしれない)。 ●(クラスのなかに)せいぜい1人か2人ですね。仲のいいというのはいなかったね。…やっぱり、今でいうけっこういじめられていたというのはあるね。僕らあんまりそういう中心的なあれではないから。結局、不登校になるでしょ。そうすると、我々年代が多いけど、ちゃんと1年行かないで、また1年生2回やるとか、その当時の学校というのがあちこちあったから。たとえばここは市街地の学校ですから、そばの通学区域内にいる人はこっちに来ないとならない。そういう意味では学校に来たり来なかったりとかいたよね、そういう人はね。 ●(〇〇には)いない。クラスにいたかもしれないけど、そういう差別なかったも。子どもの時はだよ。…だけど名字を聞いたらアイヌなんだもね。今になってわかるけどさ。 ●小学校のあたりで、〇〇あたりで、クラス21人くらいのなかで7から8人くらいはその系の方がいらっしやいましたね。…小学校の頃ですと、そういうような差別うんぬんというのはごさいませんでしたね。ただし、意見が合わない、喧嘩、子ども達の喧嘩ですね。こうなりますとやっぱり「おまえアイヌでないか」とかそういうようなことは出ましたね。
	女性	●学校へ行っても「いや、どうして」という感じのこともありましたよ。まずクラスで45人いるうちの10人くらいはいたこともありましたからね。 ●(小学校のクラスにアイヌの子は)いたと思うけど。あんまり。(本当のあれっだっていう人いないも。したって。かたっぽ、シャモの人で内地の人と結婚しているから、けっこう。あんまり、子どもの時そんな気にしないですけど。おそらくそういう人はたくさんいたと思うよ。：夫) …そんなにかかわらないんじゃないかな。小学校の時はみんな仲良く一緒に、遊んでいて、変わりはなかったと思うよ。 ●クラスに何人かの方はアイヌでした。数人。クラスは30人から40人くらい。(アイヌの子だということは) その地区にいる人達はみなさんわかっていましたね。それまであまりにも普通にそういう人達がいるから、お隣にいたりとか、だから、いじめという感覚は全くなかったですね。もう(アイヌの人がいるのが)ごく普通でしたから、あたりまえだったので。…(クラスメートとの友達関係は)普通に。(印象に残っていることは)別ない。普通ですから。ただですね。つねになんか認識はしていましたけど。あの方はアイヌの人、私達は違うという認識は多分、その地区に住んでいたすべての人は持っていたと思います。だからといって、悪口を言うとか、仲良くしないとかということはそういうことは一切なく、違うという認識はつねに頭のなかにありましたね。 ●普通に学校に来て、別にいじめたわけでもないし、いまだに普通につきあっているから。何も、別々になっていないし、普通に同じに授業でも何でも受けていたし、アイヌって、差別した覚えもないし。 ●同級生の中にもけっこういましたよ。見るからにほんとと言っちゃ悪いですけど、独特ですよ。何人くらいいたのかな。60何人のクラスで10人かそこらくらいいたかな。いじめているふうもないし、私もそういう記憶もないし。まわりでもね、あんたがアイヌだからどうか、というような記憶は私のなかでは全然ないですよ。意識はないし。いじめているふうも見なかったことないし。へたしたら今のほうがあつたのかな、もしそうであれば。

第4節 日常生活における交流

さて、子ども時代あるいは就学期間を過ぎると、アイヌの人々との交流¹⁾の舞台は、地域（近隣、町内会、子どもの学校関係など）、職場、趣味のサークルなどに移行する。そこにおいてどのような関係が築かれているのかをみていく。

第1項 アイヌの人々との交流

以下においては、アイヌの人々との交流状況に関して、交流の頻度と内容について世代毎の違いをとらえてから、交流の多寡を左右する条件を探る。

はじめに、アイヌの人々との交流「頻度」をみると、頻度は年代が上がるほど高くなっている。交流が「よくある」「たまにある」の合計比率は、青年層29.5%、壮年層56.8%、老年層64.6%である（表6-17）。交流頻度が青年層においてももっとも低く、壮年・老年層では相対的に高いという傾向は、アイヌ系住民がアイヌの人々と交流する場合も同様である（表6-18）。この数値の違いをもたらす理由としては2点考えられるだろう。

1点目は、生活史のところでも述べたように、日常生活圏にアイヌの人々がいるのかどうか、という点である。とくに老年層においては、先述のように、生活史においてアイヌの人々と出会うチャンスを相対的に多くもってきたことから、アイヌの人々との交流は、差別や摩擦や対立も含めて、きわめて日常的なものにとらえられてきたと思われる。つまり、彼らにとっては、この土地で生活することはすなわち何らかの形で交流関係をもつことを意味していたと思われる。

これに対して、より若い世代になると、「一見してアイヌと思われる容貌の人々をよく見かけること」、「彼らが自分たちとはまったく異なる生活習慣をもっていること」、あるいは「彼らが自分たちと比べものにならないほどの貧しい生活をしていること」など、これまでアイヌの特徴とされてきた諸点を年長世代ほど頻繁に目にすることは減ってくる。これは、和人と婚姻が増え、そこに誕生する子どもにはアイヌとしての特徴が薄まっていることや、アイヌの人々の生活レベルが全体として上昇したことなどの客観的状況の変化、そして、アイヌのことは学校の授業で学ばれる「知識」となり、つねに自分の身近な問題として自覚されるとは限らないという主観的状況の変化が影響していると考えられる。その結果、実際は交流があるにもかかわらず、それが「アイヌの人々との交流」であると気づかれていない場合、または、アイヌの血筋に頓着しないゆえに「アイヌの人々との交流」であるかどうかに関心である場合も考えられ、そうした事情が低い数値として表れたという見方もできよう。

2点目は、ライフスタイルのなかで、アイヌの人々との交流が自分の暮らしにおいて必要と認識されている、もしくは交流に対する積極的な思いがあるかどうか、という点である。とくに20代において交流が少ない（「よくある」「たまにある」の合計が20代24%、30代31.7%）のは、20代には学生や独身者が相対的に多く含まれており、彼らは、社会での様々な交流において、とりわけ近所付き合いのような生活場面での社交において「一人前」の付き合いをすることをあまり求められない（期待されない、あるいは猶予されている）と考えられるからである。それを示すように、近所付き合いや自治会活動への参加状況をみると、青年層の動きは著しく低調である（表6-19、表6-20）。近所の人との交流において「つきあいなし」が11.5%、「道で会えば挨拶程度」が60.9%、つまり、約7割は挨拶もしないか、あるいは挨拶のみの関係である。また、青年層では自治会活動へ「まったく参加しない」

が42.0%を占め、他2世代における不参加率が壮年層15.4%、老年層4.2%であるのとは対照的な状況である。

次いで、交流の「内容」について各世代の特徴を探る。アイヌの人々との交流が「よくある」「たまにある」と回答した者にその内容を尋ねた結果を数値の高い順に3つ並べると、青年層では「職場付き合い(50.0%)」「学生時代からの付き合い(37.5%)」「近所付き合い(28.1%)」、壮年層では「職場付き合い(45.1%)」「近所付き合い(45.1%)」「学生時代からの付き合い(36.3%)」、老年層では「近所付き合い(50.0%)」「職場付き合い(29.3%)」「趣味の付き合い(25.0%)」となる(表6-21)。3世代の交流内容を見比べると、若い世代では、教育年数が長期化し、なおかつ卒業後の年月が浅いために、学生時代からの付き合いが継続されていると思われ、就職後はそこに職場の人々との交流が加わる形となる。職業生活が自身の生活のなかで重要な位置を占めるようになるにしたがって、仕事仲間としてのアイヌの人々との交流を維持することは好悪だけではなく必要なことになっていくだろう。30代になると徐々に家庭をもつ者が増え、壮年層では、働き盛りの世代としての職場の付き合いと地域の一員としての近所付き合いが重視されるようになる。同じ地域住民として、あるいは近隣住民として、アイヌの人々とも親しく交流することが求められるだろう。老年層は退職世代であり、あるいは就労していても職業中心の生活ではなくなる者が増えるため、職場での付き合いの比重は低下し、近所付き合いや余暇の時間における交流の割合が増える。アイヌの人々との交流は人生の各世代においてこのように変わっていくとみることができる。

では、これらアイヌの人々との交流の多寡を左右する条件としてどのようなものがあるのだろうか。というのも、この交流は、1点目、近所付き合いという形で展開される場合は、様々な近隣諸関係のひとつとして位置づけられるという意味において住民の地域参加の仕方と深く関わると考えられ、2点目として、職場付き合いとしておこなわれる場合は、アイヌの人々が多く就職する、あるいはアイヌの人々とともに働く機会の多い仕事であるかどうかが大いに関わると考えられ、3点目として、アイヌの世界への親近感や知的好奇心によってより積極的に取り組まれるとすれば、アイヌ文化の体験の有無や体験したいという意欲の程度、アイヌ文化の知識の程度とも関わると考えられるからである。

まず、1点目についてみる。交流のありようを、「近所の人たちとの交流」「地域の自治会活動や行事への参加」といった地域の諸活動と関わらせてみると(表6-22、表6-23)、青年層においてはそれほどクリアに違いが表れないが、壮年層と老年層においては、互いの家を行き来するような親しい近所付き合いをしている者はアイヌの人々との交流も多い傾向にあることは明らかである。近隣にアイヌの人々が居住しているという環境を考えるなら、これは当然といえるだろう。また、自治会活動への積極度との関連をみると、これについても、壮年層と老年層では、近所付き合いと同様に、活動に積極的に参加する者ほど「交流がよくある」「たまにある」の比率は高くなる傾向がうかがえる。その際、交流が女性を中心となって担われていること(表6-24)は、生活場面での交流では「主婦」が活躍する余地が大きいことを意味するが、老年層、すなわちリタイヤ層においては男性の参加が女性と並ぶほどに増える点も注目される。これは、男性が「地域デビュー」すること、それまでの職場付き合いが退職後は近隣の友人としての付き合いに移行することが理由と考えられる。

さらに、地域活動とはいえないが、地域への思いという意味での定住志向との関連をみると、定住志向が強いほどアイヌの人々との交流が多い傾向がある(表6-25)。近隣と友好的な交流関係をもつことが、この地に長く居住し、今後も引き続き居住したいと考える者にとっては、必須の課題であ

ることは間違いない。「家や土地があるからここを離れられない」という理由は、ここを自分の土地と思い定めているとも諦めているとも受け取れるが（青年層46.3%、壮年層66.4%、老年層68.4%）（表6-26）、離れがたいということはこの地が気に入っているからでもあり、3世代のうちもっとも定住志向の強い老年層において、新ひだか町に対する肯定的な感情はもっとも強い（表6-27）。したがって、とくに老年層としては、自身が将来とも暮らしていくであろう居住環境の整備の一環として、アイヌの人々との交流関係への関心をもたれている現実があると推察される。

続いて2点目について考察する。交流のあり方と職業との関係をみると、ホワイトカラーに分類される職業とブルーカラーに分類される職業とでは異なる傾向が認められる。すなわち、世代に共通する点として、販売的職業、技能工・生産工程に関わる職業、運輸・通信的職業、農林水産的職業、サービスの職業のような、ものを作る、運ぶ、売るといった体を動かす類の仕事に就く者においては、ホワイトカラーの職業従事者よりも交流の頻度が高い（表6-28）。これらの職業においては、アイヌの人々と同僚あるいは同業者となる可能性が高いということであり、そこにおいて自然に仕事仲間としての交流が始まると考えることができる。一方、ホワイトカラーである事務的職業に就く者においては、交流が「よくある」から「ほとんどない」まで回答が散在しているものの、「ほとんどない」の比率が比較的高いことが指摘されよう。また、同じくホワイトカラーである専門・技術的職業と管理職については、世代が上がると交流頻度が高くなるが、このことは、アイヌの人々を雇用・指導・監督する立場としての付き合いが増えることを意味すると考えられる。

最後に3点目について。まず、アイヌ文化についての知識、アイヌ文化の体験、アイヌ文化の体験希望について問うた結果を掲げる。すると、アイヌ文化で知っているものがあるという者は青年層40.7%、壮年層48.4%、老年層60.1%、アイヌ文化の体験有の者は青年層6.1%、壮年層15.2%、老年層24.7%、今後アイヌ文化を体験したいという者は青年層11.9%、壮年層15.5%、老年層20.8%である（表6-29、前掲表6-10、表6-30）。これらの回答結果をアイヌの人々との交流のあり方と関わらせてみる（表6-31～33）。すると、アイヌ文化についての知識がある者、アイヌ文化の体験をしたことがある者、将来アイヌ文化を体験したいという希望をもっている者において、それぞれより頻繁な交流がおこなわれている。もとより、近所付き合いや職場付き合いという形での交流は、どちらかといえば、必要に迫られて開始される類の交流である。しかしながら、交流を継続させる基盤として、相手への興味・関心の有無は重要と考えられるのであり、「交流がよくある」層はこうした知的な部分に支えられているとみることができる。

上記1～3点に関してアイヌ系住民をみると、近所の人たちとの交流や地域の自治会・行事への参加に積極的であるほど、そして、アイヌ文化に関する知識・体験・体験希望をもつ者において、そうではない者に比して交流が多いという結果である。ただし、アイヌ文化の知識・体験・体験希望の有無についていえば、和人においては、それらをもたないことが直ちに交流から遠ざかってしまうのに対して、アイヌ系住民においては、和人と比較すれば、知識・体験・希望の有無にかかわらず一定の交流は保持される傾向があるといえそうである（表6-34～36）。

以上、日常生活におけるアイヌの人々との交流の様子をみてきた。整理すると5点にまとめられる。1点目は、世代が高いほどアイヌの人々との交流が多く、青年層の交流活動は低調であること。2点目は、近隣での社交活動の主役は壮年・老年層であり、近所付き合いや自治会活動に積極的に参加す

る者、定住志向が高い者において相対的にアイヌの人々との交流が盛んであること。3点目は、職業によってアイヌの人々との職場付き合いの程度に違いがあること。4点目は、アイヌ文化についての知識や体験をもつ者、アイヌ文化の体験希望をもつ者において交流が多いこと。5点目は、アイヌ系住民においても、和人住民同様に、アイヌ文化に関する知識・体験・体験希望をもつ者において交流が多いことである。

しかし、友人関係のように「求めて築かれ、解消も自由な交流」とは異なり、近隣関係や職場関係の交流は「嫌ならやめる」ことがそれほど容易ではない。交流の相対的な多さが差別意識の相対的な少なさを必ずしも意味するわけではない点に注意が必要であると思われる。

表6-17 アイヌの人々との交流

	度数 (%)				合計
	よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
青年	14(15.9)	12(13.6)	16(18.2)	46(52.3)	88(100.0)
壮年	47(25.4)	58(31.4)	32(17.3)	48(25.9)	185(100.0)
老年	64(27.4)	87(37.2)	43(18.4)	40(17.1)	234(100.0)
合計	125(24.7)	157(31.0)	91(17.9)	134(26.4)	507(100.0)

P<.001

表6-18 アイヌの人々との交流 (アイヌ性別)

		度数 (%)				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
青年	和人	13(15.3)	12(14.1)	16(18.8)	44(51.8)	85(100.0)
	アイヌ	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(66.7)	3(100.0)
壮年	和人	45(24.9)	58(32.0)	30(16.6)	48(26.5)	181(100.0)
	アイヌ	1(50.0)	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)	2(100.0)
	和人配偶者	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
	和人養子	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
老年	和人	56(25.5)	82(37.3)	42(19.1)	40(18.2)	220(100.0)
	アイヌ	7(53.8)	5(38.5)	1(7.7)	0(0.0)	13(100.0)
	和人養子	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)

n.s.

表6-19 近所の人たちとの交流の程度

	度数 (%)				合計
	つきあいなし	道で会えば挨拶程度	会った際に世間話	互いの家を行き来	
青年	10(11.5)	53(60.9)	21(24.1)	3(3.4)	87(100.0)
壮年	8(4.3)	93(49.5)	78(41.5)	9(4.8)	188(100.0)
老年	6(2.5)	70(29.5)	122(51.5)	39(16.5)	237(100.0)
合計	24(4.7)	216(42.2)	221(43.2)	51(10.0)	512(100.0)

P<.001

表6-20 自治会活動への参加

	度数 (%)				合計
	積極的に参加	ある程度参加	あまり参加しない	まったく参加しない	
青年	6(6.8)	23(26.1)	22(25.0)	37(42.0)	88(100.0)
壮年	37(19.7)	76(40.4)	46(24.5)	29(15.4)	188(100.0)
老年	65(27.2)	141(59.0)	23(9.6)	10(4.2)	239(100.0)
合計	108(21.0)	240(46.6)	91(17.7)	76(14.8)	515(100.0)

P<.001

表6-21 アイヌの人々との交流の内容（複数回答）

	度数（応答者数の％）							合計
	近所付き合い	職場付き合い	趣味の付き合い	子どもを介した付き合い	インターネット	学生時代	その他	
青年	9(28.1)	16(50.0)	4(12.5)	4(12.5)	0(0.0)	12(37.5)	7(21.9)	32(100.0)
壮年	51(45.1)	51(45.1)	17(15.0)	30(26.5)	0(0.0)	41(36.3)	18(15.9)	113(100.0)
老年	82(50.0)	48(29.3)	41(25.0)	10(6.1)	0(0.0)	26(15.9)	23(14.0)	164(100.0)
合計	142(46.0)	115(37.2)	62(20.1)	44(14.2)	0(0.0)	79(25.6)	48(15.5)	309(100.0)

表6-22 アイヌの人々との交流×近所の人たちとの交流

		度数（％）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
青年	近所付き合いがない	1(10.0)	1(10.0)	2(20.0)	6(60.0)	10(100.0)
	道で挨拶程度	6(11.3)	7(13.2)	12(22.6)	28(52.8)	53(100.0)
	会った際に世間話	5(23.8)	4(19.0)	2(9.5)	10(47.6)	21(100.0)
	互いの家行き来	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(66.7)	3(100.0)
壮年	近所付き合いがない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	8(100.0)	8(100.0)
	道で挨拶程度	22(23.9)	31(33.7)	16(17.4)	23(25.0)	92(100.0)
	会った際に世間話	21(28.4)	24(32.4)	14(18.9)	15(20.3)	74(100.0)
	互いの家行き来	3(33.3)	3(33.3)	2(22.2)	1(11.1)	9(100.0)
老年	近所付き合いがない	2(33.3)	1(16.7)	0(0.0)	3(50.0)	6(100.0)
	道で挨拶程度	11(15.9)	24(34.8)	13(18.8)	21(30.4)	69(100.0)
	会った際に世間話	35(29.7)	45(38.1)	23(19.5)	15(12.7)	118(100.0)
	互いの家行き来	16(42.1)	15(39.5)	6(15.8)	1(2.6)	38(100.0)

表6-23 アイヌの人々との交流×自治会活動への参加

		度数（％）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
青年	積極的に参加	1(16.7)	1(16.7)	1(16.7)	3(50.0)	6(100.0)
	ある程度参加	5(21.7)	3(13.0)	5(21.7)	10(43.5)	23(100.0)
	あまり参加せず	4(18.2)	4(18.2)	4(18.2)	10(45.5)	22(100.0)
	まったく参加せず	4(10.8)	4(10.8)	6(16.2)	23(62.2)	37(100.0)
壮年	積極的に参加	12(33.3)	12(33.3)	7(19.4)	5(13.9)	36(100.0)
	ある程度参加	21(28.8)	26(35.6)	11(15.1)	15(20.5)	73(100.0)
	あまり参加せず	9(19.6)	13(28.3)	10(21.7)	14(30.4)	46(100.0)
	まったく参加せず	5(17.9)	5(17.9)	4(14.3)	14(50.0)	28(100.0)
老年	積極的に参加	18(27.7)	29(44.6)	9(13.8)	9(13.8)	65(100.0)
	ある程度参加	37(27.0)	53(38.7)	29(21.2)	18(13.1)	137(100.0)
	あまり参加せず	8(38.1)	4(19.0)	4(19.0)	5(23.8)	21(100.0)
	まったく参加せず	1(10.0)	1(10.0)	1(10.0)	7(70.0)	10(100.0)

表6-24 アイヌの人々との交流×性別

		度数（％）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
青年	男性	9(20.5)	6(13.6)	9(20.5)	20(45.5)	44(100.0)
	女性	5(11.4)	6(13.6)	7(15.9)	26(59.1)	44(100.0)
壮年	男性	21(23.9)	26(29.5)	15(17.0)	26(29.5)	88(100.0)
	女性	26(26.8)	32(33.0)	17(17.5)	22(22.7)	97(100.0)
老年	男性	29(25.4)	50(43.9)	16(14.0)	19(16.7)	114(100.0)
	女性	35(29.2)	37(30.8)	27(22.5)	21(17.5)	120(100.0)

表6-25 アイヌの人々との交流×定住志向

		度数 (%)				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
青年	ずっと住みたい	10(26.3)	5(13.2)	6(15.8)	17(44.7)	38(100.0)
	移りたい	2(14.3)	2(14.3)	2(14.3)	8(57.1)	14(100.0)
	移る予定あり	0(0.0)	3(27.3)	3(27.3)	5(45.5)	11(100.0)
	わからない	2(8.3)	2(8.3)	5(20.8)	15(62.5)	24(100.0)
壮年	ずっと住みたい	31(29.2)	38(35.8)	16(15.1)	21(19.8)	106(100.0)
	移りたい	8(29.6)	6(22.2)	5(18.5)	8(29.6)	27(100.0)
	移る予定あり	2(18.2)	2(18.2)	2(18.2)	5(45.5)	11(100.0)
	わからない	5(12.8)	12(30.8)	9(23.1)	13(33.3)	39(100.0)
老年	ずっと住みたい	59(29.9)	77(39.1)	31(15.7)	30(15.2)	197(100.0)
	移りたい	2(18.2)	1(9.1)	3(27.3)	5(45.5)	11(100.0)
	移る予定あり	1(33.3)	1(33.3)	0(0.0)	1(33.3)	3(100.0)
	わからない	2(9.1)	7(31.8)	9(40.9)	4(18.2)	22(100.0)

表6-26 定住志向 今の場所にずっと住みたい理由（複数回答）

	度数（応答者数の%）						合計
	生活環境がよいから	人間関係がよいから	親の面倒をみるため	ここに土地や家があるから	職場や学校が近いから	その他	
青年	14(34.1)	8(19.5)	12(29.3)	19(46.3)	18(43.9)	4(9.8)	41(100.0)
壮年	46(41.8)	20(18.2)	39(35.5)	73(66.4)	25(22.7)	3(2.7)	110(100.0)
老年	94(45.6)	34(16.5)	11(5.3)	141(68.4)	10(4.9)	13(6.3)	206(100.0)
合計	154(43.1)	62(17.4)	62(17.4)	233(65.3)	53(14.8)	20(5.6)	357(100.0)

表6-27 新ひだか町について感じる事 「とてもそう思う」「ある程度そう思う」の合計

	度数 (%)						
	住民のまとまりが強い	新しい住民も馴染みやすい	自由にもの言える	日常的付き合いがざかん	文化・習慣を大事にする	昔からの住民の意見強い	新しいものを取り入れる
青年	30(34.1)	45(51.2)	30(34.1)	32(36.4)	43(48.9)	54(62.0)	19(21.6)
壮年	75(40.8)	107(58.1)	76(41.3)	85(46.2)	85(46.5)	116(63.1)	55(29.9)
老年	121(56.5)	158(70.3)	132(61.7)	117(54.4)	129(60.2)	104(48.6)	94(43.5)

表 6-28 アイヌの人々との交流×職業

		度数 (%)				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
青年	事務的職業	1(7.1)	4(28.6)	3(21.4)	6(42.9)	14(100.0)
	保安的職業	0(0.0)	0(0.0)	2(66.7)	1(33.3)	3(100.0)
	販売的職業	1(14.3)	2(28.6)	0(0.0)	4(57.1)	7(100.0)
	技能工・生産工程	3(60.0)	0(0.0)	1(20.0)	1(20.0)	5(100.0)
	運輸・通信	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
	専門・技術的	3(30.0)	2(20.0)	2(20.0)	3(30.0)	10(100.0)
	管理的	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	農林水産的	0(0.0)	1(20.0)	0(0.0)	4(80.0)	5(100.0)
	サービスの	1(14.3)	1(14.3)	0(0.0)	5(71.4)	7(100.0)
	その他	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(100.0)	3(100.0)
壮年	事務的職業	5(26.3)	4(21.1)	1(5.3)	9(47.4)	19(100.0)
	保安的職業	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	販売的職業	5(27.8)	8(44.4)	3(16.7)	2(11.1)	18(100.0)
	技能工・生産工程	1(12.5)	5(62.5)	0(0.0)	2(25.0)	8(100.0)
	運輸・通信	1(16.7)	4(66.7)	0(0.0)	1(16.7)	6(100.0)
	専門・技術的	7(35.0)	2(10.0)	7(35.0)	4(20.0)	20(100.0)
	管理的	2(25.0)	4(50.0)	2(25.0)	0(0.0)	8(100.0)
	農林水産的	2(15.4)	5(38.5)	3(23.1)	3(23.1)	13(100.0)
	サービスの	6(33.3)	5(27.8)	2(11.1)	5(27.8)	18(100.0)
	その他	1(33.3)	1(33.3)	1(33.3)	0(0.0)	3(100.0)
老年	事務的職業	2(22.2)	3(33.3)	1(11.1)	3(33.3)	9(100.0)
	保安的職業	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	1(100.0)
	販売的職業	2(33.3)	1(16.7)	2(33.3)	1(16.7)	6(100.0)
	技能工・生産工程	2(20.0)	4(40.0)	2(20.0)	2(20.0)	10(100.0)
	運輸・通信	1(20.0)	4(80.0)	0(0.0)	0(0.0)	5(100.0)
	専門・技術的	4(44.4)	3(33.3)	0(0.0)	2(22.2)	9(100.0)
	管理的	1(20.0)	2(40.0)	1(20.0)	1(20.0)	5(100.0)
	農林水産的	7(36.8)	8(42.1)	4(21.1)	0(0.0)	19(100.0)
	サービスの	3(20.0)	7(46.7)	2(13.3)	3(20.0)	15(100.0)
	その他	2(28.6)	2(28.6)	2(28.6)	1(14.3)	7(100.0)

表 6-29 アイヌ文化の知識の有無

	度数 (%)		合計
	知っているものがある	知っているものはない	
青年	35(40.7)	51(59.3)	86(100.0)
壮年	88(48.4)	94(51.6)	182(100.0)
老年	128(60.1)	85(39.9)	213(100.0)
合計	251(52.2)	230(47.8)	481(100.0)

P<.01

表 6-30 アイヌ文化の体験希望の有無

	度数 (%)		合計
	体験・参加を希望	体験・参加を希望せず	
青年	10(11.9)	74(88.1)	84(100.0)
壮年	26(15.5)	142(84.5)	168(100.0)
老年	33(20.8)	126(79.2)	159(100.0)
合計	69(16.8)	342(83.2)	411(100.0)

n.s.

表6-31 アイヌの人々との交流×アイヌ文化の知識の有無

		度数 (%)				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
青年	知っている	7(20.6)	6(17.6)	11(32.4)	10(29.4)	34(100.0)
	知らない	7(13.7)	6(11.8)	5(9.8)	33(64.7)	51(100.0)
壮年	知っている	27(31.4)	27(31.4)	16(18.6)	16(18.6)	86(100.0)
	知らない	18(19.8)	29(31.9)	15(16.5)	29(31.9)	91(100.0)
老年	知っている	41(33.3)	41(33.3)	21(17.1)	20(16.3)	123(100.0)
	知らない	18(22.2)	31(38.3)	14(17.3)	18(22.2)	81(100.0)

表6-32 アイヌの人々との交流×アイヌ文化の体験の有無

		度数 (%)				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
青年	体験・参加有	1(20.0)	2(40.0)	1(20.0)	1(20.0)	5(100.0)
	体験・参加なし	11(14.5)	9(11.9)	15(19.7)	41(53.9)	76(100.0)
壮年	体験・参加有	13(50.0)	5(19.2)	5(19.2)	3(11.5)	26(100.0)
	体験・参加なし	26(18.6)	49(35.0)	22(15.7)	43(30.7)	140(100.0)
老年	体験・参加有	18(40.9)	15(34.1)	3(6.8)	8(18.2)	44(100.0)
	体験・参加なし	35(24.2)	46(35.9)	26(20.3)	25(19.5)	128(100.0)

表6-33 アイヌの人々との交流×アイヌ文化の体験希望の有無

		度数 (%)				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
青年	希望あり	4(40.0)	0(0.0)	1(10.0)	5(50.0)	10(100.0)
	希望なし	8(11.0)	11(15.1)	15(20.5)	39(53.4)	73(100.0)
壮年	希望あり	10(41.7)	5(20.8)	4(16.7)	5(20.8)	24(100.0)
	希望なし	26(18.7)	49(35.3)	23(16.5)	41(29.5)	139(100.0)
老年	希望あり	17(51.5)	8(24.2)	3(9.1)	5(15.2)	33(100.0)
	希望なし	27(22.5)	43(35.8)	25(20.8)	25(20.8)	120(100.0)

表6-34 アイヌの人々との交流×アイヌ文化の知識の有無 (アイヌ性別)

		度数 (%)				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人	知っている	70(29.9)	70(29.9)	46(19.7)	48(20.5)	234(100.0)
	知らない	41(18.7)	66(30.1)	34(15.5)	78(35.6)	219(100.0)
アイヌ	知っている	6(54.5)	4(36.4)	1(9.1)	0(0.0)	11(100.0)
	知らない	1(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	2(66.7)	3(100.0)
和人配偶者	知っている	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	知らない	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
和人養子	知っている	1(50.0)	0(0.0)	1(50.0)	0(0.0)	2(100.0)
	知らない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

表6-35 アイヌの人との交流×アイヌ文化の体験の有無 (アイヌ性別)

		度数 (%)				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人	体験・参加有	29(40.8)	21(29.6)	9(12.7)	12(16.9)	71(100.0)
	体験・参加なし	64(19.0)	103(30.6)	61(18.1)	109(32.3)	337(100.0)
アイヌ	体験・参加有	3(75.0)	1(25.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(100.0)
	体験・参加なし	4(50.0)	1(12.5)	1(12.5)	2(25.0)	8(100.0)
和人配偶者	体験・参加有	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	体験・参加なし	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
和人養子	体験・参加有	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	体験・参加なし	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)

表 6-36 アイヌの人々との交流×アイヌ文化の体験希望の有無（アイヌ性別）

		度数（％）				合計
		よくある	たまにある	あまりない	ほとんどない	
和人	希望あり	31(45.6)	13(19.1)	8(11.8)	16(23.5)	68(100.0)
	希望なし	56(17.4)	101(31.4)	61(18.9)	104(32.3)	322(100.0)
アイヌ	希望あり	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	希望なし	5(50.0)	2(20.0)	1(10.0)	2(20.0)	10(100.0)
和人配偶者	希望あり	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	希望なし	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
和人養子	希望あり	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	希望なし	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)

表 6-37 近隣や職場でのアイヌの人々との関わり・交流

		●は和人住民 ■はアイヌ系住民
壮年	男性	●ここに家を建てたのも別にアイヌの人がいいとか悪いとかということもないし。ここの自治会の人は友達だから。お酒飲んで騒いだ時にアイヌだとかシャモだとかということはあるんですが、そんな程度で、それを根にもってということも別にありません。（自治会の催しなどが）あります。16日も敬老の日でおじいちゃん、おばあちゃんがけっこういるもんですから、生活館に集まって、みんなでお祝いをしました。50軒のうち、30軒くらいしか来ていなかったけれど、そのうちアイヌの軒数が4軒か5軒くらいは来ていましたから。別にここのうちの自治会ではそういうアイヌだとか和人とかかという意識はないから、みんな毎日会っているからさ。若い頃から、ここの家を建てる前からここの自治会にはいたんですよ、僕。そうなんだけど、それで町に家を建てようかと思ったけれど、ここ安く売ってあげるから、ここで家を建てよ、となって、それで。別にアイヌだからどうだこうだということはいっさいないですね。
	女性	●（職場の病院では）アイヌの人とアイヌじゃない人のすごい差があって、薬自体が、薬を包む薄い四角い薬包紙っていうのが、昔あったのね。その薬包紙すらもアイヌにはくれないの。普通の人達にはくれるの。持っておいでって、すごい差別だったの。袋も全然なし。すごいやっぱり差別がひどかったみたい。…アイヌの友達はいくの。一緒に買い物したり、お食事したりしているけど、あらそうおっという感じの人もいるんだよね。〇〇の一緒に働いていた人に「疎いね」って私は言われるんだよね。「どこか」って言うんだけど。年を取ったらわからないんだよね。髪も白いし、そんなふうに見えるんだけど。でも、まわり近所を見たら、ぐるっと、アイヌはいるんですよ。でも、あんまり、そういうことを気にする人もいるし、気にしない人もいるから、あまりおおっぴらに言えないんだよね。気にしている人もいるし。どこまで、そのところはデリケートな部分だから、言えないんだよね。どこまで、どうやって言っているのかっていうのがね。となり近所だし。 ●この辺では、もう、そういう人たちのこと、私達の母の世代は嫌いだ、嫌だって言いますけど。結婚する時に、頼むからやめてくれと言われたことはありますけど。でも私達の代はもうわかる人のほうが少ない。そうかなっていうくらいだから。だから、本当に毛深いとかむこうかなと思っている人でも全然関係なくお友達にはなれるかな。…本当にお友達のお友達から、こうなんか誘われて、それでもって、お友達になった方なんだけど。…その時にはほんとに「偏見ないの」というふうには言われましたね。私は「ない」と言ったら、「変な人」って言われましたけど、それはすごい印象に残っています、変な人と。でも、すごく一生懸命生きていて、貧しくもないし。だんなさんも一生懸命働いていて。普通の人。全然、私達よりすごい勤勉な人って、思っていましたね。
老年	男性	■仕事をして行く上で大変なのは田舎なので普通に人間関係くらい。アイヌということは関係がない。 ■教員をしている時にアイヌの子どもたちがクラスにはいた。〇〇時代は〇〇にコタンがあるので、中学校の受け持ちの生徒にアイヌはいたけれど、差別はなかったと思う。教員をしていた最後の1年間は〇〇中学校で働いた。〇〇という姓が多かった。先生のなかに和人には温かく、アイヌの子に冷たいという傾向があった。アイヌの子は全体の3分の1から半分はいたかもしれない。同じことをしても、和人は怒られないけれど、アイヌの子は怒られるということがあった。自分はアイヌの肩をもつわけではなかったが、アイヌも和人も平等と考えていた。和人で一番優秀な子がいたずらをしたことがあった。自分は教員生活でげんこつを食わせることはめったになかったが、その時にげんこつを食わせた。すると、アイヌの子に喜ばれ、今までそんなことをしてくれた先生はいないと言って、アイヌの子ども達の人気者になった。 ●（自分の会社では現在アイヌの血筋の者を3人雇っている関係もあり）必ずカムイノミには鮭が必要だから、それは毎年うちで出している。寄付したり、安く。今はもう寄付とかは今ほだめになっていて、そういうのはだめだということで、ある程度お金はいただかないと出せませんから。（寄付はだめだが）現実的には部落の行事があったら酒の一本でも出せと強要されるし。…選挙のこともあるけれど、アイヌの人で建設会社を作っていて、うちあたり、燃料、ガソリンとか、そういうのを現場に運んで行ったり。そういう人が成功しているから、そういう人の会社の新年会に招待されたり、会社の運動会だからと行ったり。選挙ではその人が応援している国会議員を頼むと言われたり。たまに晩一杯飲みに行ったりすると、けっこう従業員でいたり。純粋ではないけど、混血だったり。あとは、うちで使っているから。選挙幹部で親戚の人がいたり。この辺ならごく普通ですね。日常。好んでも好まなくても。油入れに来たとか魚買いに来たとか。町内会もあるし。あんまり気になるようなことはないですけどね。 ●9月の23日頃、イチャルパ、シャクシャイン祭りあるしょ。静内の山の上で。全道から集まるしょ。〇〇のドライバーをやっていた時、ここの、アイヌの人みんな乗せてね、シャクシャインの祭りに、行くのさ。何年もやったことあるよ。したらね、そこでは終わったら酒はあんまり飲まないんだ。自分ら部落に帰ってきたら、飲むのさ。したら、喧嘩が始まるんだ、仲間同士で。「運転手さんも終わったら来てくれ」と言われるんだ。行かないと怒るんだわ。「アイヌの物だからあんた、きたないと思って食わないのか。」とかね。「おれらがアイヌだからおまえ食わないのか」と言うんだわ。 ●アイヌの人と一緒にあったのは〇〇に来て、初めて子どもの中にいましたね。クラスに何人もいない。学校の先生で赴任したとき生徒でアイヌの子がいてそれが初めてでしたね。それまで全然わからなかったですね。（アイヌの子どもに対しては他の先生も皆分け隔てなく？）そうですね。僕がなった頃はみんなそういう感じでしたね。今もまだ最初に教えた子どもと付き合っていますよ。もう65過ぎていきますけどね。だから、初めからそういう感じは何もないですね。みんな平等で。たまに会ってもね、一緒に一杯飲んで、騒いで、カラオケに行って、だから、そんな感じは何もないですね。

	●私はそれなりのおつきあいはございます。アイヌという言葉それ自体を、要するに本当に同化がされていますんで、本当にアイヌという人筋の方はいらっしゃるんですけど、なかなか「私はアイヌです」と名乗る方は少ないです。そういうような関係上、私どももアイヌという言葉を出していいのかどうかというのはあります。私自体はそういうお友達もおりますので、この方ですと容易にその話はいたします。でも、やはり一般的にそういう話ができるかどうかというのはございますね。そして、自分たちが「私はアイヌです」と言える方はそういらっしゃるいません。この地区では。…私はもともと山林関係の仕事もしたことがございますので、その時に相当アイヌの人がたが作業に来ておりましたので、そういう関係上アイヌの人がたとおつきあいはするようになりましたね。…〈もう本当に失礼なんですけど、私達こうあんまりないでしょ、私もほんとに若かったから、今になったら失礼なことをしたと思うんですけど、お茶を出したあと、消毒していたの。わからないよね、普通なんだよ、なんでもないことなのに。こわかったの。やさしんですけど、顔がこわいんですよ。自分も子どもの頃一緒に遊んでいるのに、大人の人を見た時にすごく怖い感じしてね。でも、そうやって、お話しているうちに盛り上がったってね、楽しかったけど。そんなに悪い人ばかりいないんだから、良い人もいっぱいいるから。知らないからそういうことをしてしまって、今になったら、申し訳なかったと思って。陰でそんなことしてね。申し訳ないとは思うけど。今ここにもおりますよ、たくさん。…妻〉〈私ここの保育所にいたんですけど。その子のお母さんが出してくれたお茶を飲んだり、お菓子を食べたり、そして、子どもをだっこしたりすると、そのお母さんが「私みたいなの子どもを大事にしてくれるんだね」って。「うちに来て、こうやってお菓子食べられるんだね」って言われて。「何言っているの、みんな同じでしょ、そういう事言わないでちょうだい」って。それからもうすぐ子ども達も、私好きなんです、今は。もう、いつも声掛けするし、あの、うちの阿波踊りやっているけど、阿波踊りにもいます、そういう人達が。大きなお兄ちゃんにでも、私〇〇していますから、怒ることはいっぱいありますけど。お母さんが見ている、子どもも喜んでくれるし、近づけるんですよ。気持ちをわかってもらえる。言葉で言わなくてもわかってもらえる。この辺ではそういうふうにおつきあひしています。お父さんも全然そう言う人でないから。…妻〉〈私達家族でつきあっている方がいます。その方は最初は絶対アイヌということは口にしないし、言われるのも嫌でいたんですけど、お父さんと家族ぐるみのおつきあひしていますから、自分のほうから言う、そして、お父さんとそっこのほうの勉強もしていますから、何でも教えてくれたり、本当にいいお付き合いしていますけど。…妻〉 ●〇〇時代は、ずいぶんアイヌの人との付き合いはありましたよ。PTAの役員にアイヌのお父さんがなっていて、その子どもが9人いてとか。家内が亡くなった時に〇〇の見える所に埋めておきたいと思って、そしたら、そのとなりにアイヌの人の父さんが亡くなって墓を作っていたから、うちの墓もついでに作ってねと頼んだのはアイヌの子どもでした。アイヌの子どもといっても教え子ですけどね。…アイヌの当時娘さんが給食を作り学校にちょっと勤めていて、給食をおばさんとその娘さんとで作っていたんですね。そうすると、学校の教員のなかでもいろいろありまして、今は変わったんでしょうけど、その当時は「アイヌの作ったものを食べれるか」ということを言うような人がいて。…友達たくさんいるんですよ、アイヌの人でね。詩を書いたり、彫り物したり、そして、文化連盟に所属していて、一生懸命版画で彫って色美しい年賀状をくれたり。静内町の賞を僕ももらったりするでしょ。そうするとお祝にね、版画を作って送ってくれたりする。アイヌというとその人の顔を思い浮かべたりする。何か一生懸命生きてきて、全くアイヌの人全般には触れられないけれど、そんな全般はわからなくていいんだ。
女性	●私はここで生まれ育って、そして借家していた時にアイヌの人が新婚で入って来て、その人達とずっとおつきあひしていて、今でもだから、そこのじいちゃん、ばあちゃんも亡くなったけれど、子どもさんたちとはおつきあひしていますけれどね。この辺はとくに多いところだと、本当にもうひとかたまり。でも、この10年くらいでなくなりましたよね、(10年くらい前は)ある程度の年齢、年の人がいたから、そんな感じはしましたけれども、その娘さん息子さんたちは、普通の人たちと結婚して、そして帰って来てそこで生活するようになったから、もう本当に、そう言われれば今あまりそういう感じはなくなってきています。 ●ここに、引越してきたらね、ここの裏みんなそうなんだよ。半分そう。奥さんがね。(39年に来た頃。この辺の人なんてずっとほとんど、そうだよ。かたっぱは内地の人たちと結婚して。：夫)。内地の人って。そういう人わからないでもらうんだから。だからけっこう多いですよ。だから親戚周りずっと。この間も不幸があったんだけどね。そういう人がたって親戚でたくさんいるのね。となり近所みんな親戚。(親戚がみんな近いことについては) いいです? いいかな。悪いか。善し悪し。あんまりあっても。(普通の人よりはやっぱり、近所付き合いは、それはあるわな、あの人たちは。あの人は輪がまるいってどうか、普通の人達は菱形か何かかもしれないけれど、あの人はまるい。：夫) …ほんと、ここに引越してきてびっくりしたんだわ。ずっといるんだよ。立派な家に入っている。うちみたいなボロ屋でないんだわ。(旦那がほとんど、ここの人達は内地の人。旦那がアイヌという場合もあるけれど、珍しい。アイヌ同士で結婚しているのは、昭和30年40年近くってからだったら、そんなにいないでないかな。同士で結婚しているのは珍しいよ。女の人はね、外人と結婚するようなもんで。：夫) ●(町内にアイヌの方は) 住んでいます。普通にお隣同士でお付き合いしている。(アイヌだということは皆知っているのか) そう思いますね。(言葉に出して、ということはありませんか) そうですね。 ●私達もう農協に買物に行ったら姉の友達にも会うけど、普通どおりに挨拶して話もするし、同級生は「遊びに行くよ」って、普通につきあうから。つまはじきするわけでもないから。普通どおりにいます。常時遊ぶっていったら変ですけど。うちの旦那は同級生とそんなに遊ばないけど、私達はちょこちょこ会いますから、普通どおり、何の偏見もなく接していますから。同じです。何も何かするわけでもないね。 ●私本当にね、アイヌの子の担任をした記憶ないなあ。担任をずっとしているけど。〇〇にずっといて、9年担任しているけど。いじめがあって、どうだとか。いましたよ。そういう子、いましたけど、親からあれされたという記憶がないですものね。きっとその時には何代か、あれして来ているから。昔と違って失礼な言い方なんですけど、アイヌっていう感じしましたよね。あの独特のが、ありましたでしょ。今はわからないですよ。ほんとに。生活も全く同じ。ないですね。きっと今ぼつとあってもわからない。いるんですよ。もう何代かにこうやって。

第2項 近隣住民としてのつきあい

次に、インタビューデータより、日常生活においてアイヌの人々とどのような交流がおこなわれているのかをみる(表6-37)²⁾。語られているのは、ほとんどが「近所付き合い」としての交流についてである。たとえば、仕事関係の付き合いとしては、自分の会社でアイヌの人々を雇用している関係上、彼らの行事に招かれたり、アイヌの人々が経営する会社との付き合いが生まれたりしたケース(老年男性)、山林関係の仕事をしていたときにアイヌの人々が作業に来ており、そこで付き合いが生まれたケース(老年男性)があげられるが、数としてはわずかなものである³⁾。

そこで、「近所付き合い」としての交流に焦点を当ててみると、近隣のアイヌの人々との関係については、差別をすることなく、「普通に」付き合っているという趣旨の回答ばかりである。「お酒飲んで騒いだ時にアイヌだとかシャモだとかということはありませんが、そんな程度で、それを根にもってということも別にありません」(壮年男性)、「私はここで生まれ育って、そして借家していた時にアイヌの人が新婚で入って来て、その人達とずっとおつきあいして、今でもだから、そのじいちゃん、ばあちゃんも亡くなったけれど、子どもさんたちとはおつきあっていますけれどね」(老年女性)、「普通にお隣同士でお付き合いしている」(老年女性)といった発言が聞かれる。

このように、アイヌの人々との交流が「普通に」おこなわれる、あるいは、「普通に」おこなわれることを後押しする条件・環境としては3点考えられよう。1点目は、個人的な友人関係が成立していることである。「この自治会の人は友だちだから。…別にこのうちの自治会ではそういうアイヌだとか和人とかという意識はないから、みんな毎日会っているからさ」(壮年男性)、「アイヌの友だちはいるの。一緒に買い物したり、お食事したり…」(壮年女性)、「同級生は「遊びに行くよ」って、普通につきあうから。…私達はちょこちょこ会いますから、普通どおり、何の偏見もなく接していますから。同じです」(老年女性)、「私達家族でつきあっている方がいます。その方は最初は絶対アイヌということは口にしないし、言われるのも嫌でいたんですけど、お父さんと家族ぐるみのつきあいしていますから、自分のほうから言う、そして、お父さんとそっちのほうの勉強もしていますから、何でも教えてくれたり、本当にいいお付き合いしていますけどね」(老年男性の妻)といった言葉からは、個別に親しい関係が築かれることがアイヌ全体への偏見や差別へと簡単に巻き込まれないための力となることがわかる。このことは、いいかえるなら、アイヌの人々の境遇への理解や気遣いが深められることである。たとえば、前記の壮年女性は「そういうことを気にする人もいるし、気にしない人もいるから、あまりおおっぴらに言えないんだよね。気にしている人もいるし。どこまで、そのところはデリケートな部分だから、言えないんだよね。どこまで、どうやって言っているのかっていうのがね。となり近所だし」と述べている。

2点目は、この地に暮らす者としてアイヌの歴史を多少とも知っていることである。この地がアイヌの人々にとって先祖代々の土地であるという認識が、いくぶんかは、和人からの排他的な発言の抑止力となっている部分もあると思われる。それをよく示す言葉としては、「アイヌの人にしてみれば、勝手に日本人が北海道の土地をいように好き勝手に取ったという言い方が正しいかどうかかわからないけれど、そう考えて行けば、アイヌの人たちは過去のいきさつからしてもそうだと思う。現実的に北海道の土地を返せと、そんなことにはならないと思うけど」(壮年男性)、「今でもそういう人がたはどっちかというね、原住民だから。この辺は、結局、明治維新で政府の政策で入植したり、そうするとこの辺は新潟県の方から来たり、淡路島から来たり、福井県、岩手県から来たり、そういうかたまってくるから。そうすると今まで何事もなくアイヌは生活していたんだから」(老年男性)、「やっぱり北海道だけじゃないでしょうけどアイヌの人方ね。やっぱり先住民族だからね。北海道で言うとさ。和人なんかあとからきて、ぶんどっちゃったみたいなのところが結構あるわけだね、物の本なんか読んでみますとね」(老年男性)というものがある。

3点目は、アイヌと和人のカップルが増加したことである。「今は混血進んでいるから。純粋なアイヌはいなくなっている。だいたい4分の1とか8分の1とか、半分とか、今わからないね。ちょっと毛深いとか」(老年男性)といった現状認識が語られる。混血が進んだことにより、「アイヌ」「和人」

という単純な区分の仕方は現実には意味をなさなくなっている。かつてはアイヌの人々に特徴的とされた生活習慣も、若い世代になるほど、そして混血が繰り返されるほど消えていき、周囲の住民からすれば、アイヌの人々に対して抱かれていた特殊なイメージは薄れていくだろう。また、これまでアイヌ差別のきっかけとしてその特徴的な容貌があげられてきたことを考えるならば、混血により、外見上アイヌの血筋と判別できない人々が出現していることは、容貌を中傷する類の差別的行為を減少させる方向に働くだろうと推察される。

以上、日常生活におけるアイヌの人々との交流の中心は近所付き合いであり、そこにおいては、彼らを特別扱いすることなく、差別することもなく、「普通」の交流がおこなわれている。この「普通」の交流が成立するうえでは3つの条件・環境があると考えられる。1点目はアイヌの人々との間に個人的な友人関係が成立していること。2点目はこの地がアイヌの人々のホームベースであることが知られていること。3点目はアイヌと和人のカップルが増加し、アイヌの人々のとくに容貌に関わる違いが見えなくなりつつあることである。では、近所付き合いとは異なる交流も同様に「普通」におこなわれているのだろうか。

第5節 結婚による結びつき——和人とアイヌのカップルへの眼差し

人と人との交流のあり方には、家族・親族関係の成立とそこで新たに生じる親密・濃密な交流も含まれる。最たるものは結婚だろう。結婚はきわめて私的な交流であると同時に、社会的・法的に承認された関係性という意味ではきわめて公的な交流ともいえるのであり、これを問うことによって、住民の本音が浮かび上がることが予想される。

和人とアイヌの結婚の増加傾向については、近隣や職場でのアイヌの人々との関わり・交流（前掲表6-37）が語られるなかでも指摘されており、その語りのなかには、そうした結婚への忌避的感情やアイヌとの結婚を選択する和人に対する「同情」が表明されているものがある。たとえば、「この辺はとくに多いところだと、本当にもうひとかたまり。でも、この10年くらいでなくなりましたよね。（10年くらい前は）ある程度の年齢、年の人がいたから、そんな感じはしましたけれども、その娘さん息子さんたちは、普通の人たちと結婚して、そして帰って来てそこで生活するようになったから、もう本当に、そう言われれば今あまりそういう感じはなくなっている」（老年女性）、「だんながほとんど、ここら辺の人達は内地の人。だんながアイヌという場合もあるけれど、珍しい。アイヌ同士で結婚しているのは、昭和30年40年近くなってからだったら、そんなにいないんでないかな。同士で結婚しているのは珍しいよ。女の人ね、外人と結婚するようなもんでよ」（老年女性の夫）という発言の細部をみると、和人と結婚することが「普通の人たちと結婚」、アイヌと結婚することが「外人と結婚するようなもん」と表現されている。また、アイヌ女性と結婚する和人男性については「内地の人って。そういう人わからないでもらうんだから」（老年女性）と評されている。こういった言葉は、アイヌの人々を異分子ととらえる感覚をもつ者が存在することを示すものといえる。

ここで重要なのは、それらの住民の態度にみえる二重性、すなわち、周囲のアイヌの人々を特別視することなく、彼らと普通に付き合っていると言いながらも、結婚に関しては否定的であるという点である。そして、その二重性について自身は無自覚、無頓着であるように思われる。この態度は、和人とアイヌの結婚を、一般論としてではなく当事者の問題（住民自身あるいは住民の身内の結婚）と

して問うたときも同様である（表6-38）。その場合、結婚を望まない・反対する理由を一言でいえば、その結婚によって生きづらさを被りたくない・被らせたくないということになるが、もう少し具体的に示すと3点にまとめられるだろう。

1点目は、いうまでもなく、アイヌ差別がまだ存在することである。ある老年女性は、自分の同僚（和人）がアイヌ男性と結婚しようとしたとき、職場で大問題となり、職場が女性の両親を呼んで結婚をやめるよう説得した一件を挙げて、「表面上は何も言わなくても、仕事の差別とか生活的な差別とか潜在的にあると思いますね」と語る。そうした差別を避けるために、「アイヌはきれいな人が多い」、「アイヌの人に関しては友だちだったら全然気にしない」と言いつつも、こと結婚については「俺自体が結婚しようとは思わなかった。知らないでつきあっていたら一緒になったかもしれないけれど。見た目でアイヌという感じの人と結婚しようとは間違っても一緒になろうとは思わなかった」（老年男性）と述べるのである。また、同じ男性は、自分の娘の結婚についても、「見た目が100%アイヌだなとわかったら、〈ここから出て行きなさい〉と言うだろうね。見た目にあんまりわからないようだったらいいけどね。だからその人がハーフやクォーターだったら許せるけどね。両親がアイヌだったらやっぱりやめておけと言うだろうね」と反対の意志を示している。

2点目は、1点目と深く関わるが、そのカップルの間にアイヌとわかる特徴を備えた子どもが誕生する可能性があることである。新しい世代（自分の子どもや孫）がそのためにもし差別の対象となり、苦勞することが予想されるなら、その結婚はなされるべきではない、という考え方である。外見を気にすることは理屈では説明できないところもあり、それゆえに根深い。アイヌの容貌については、「やっぱり見ているとだんだん出てくるんだよね。年齢とともに、小さい時は全然かわらないかな、可愛いなと思っていても、その人が結婚したとか、年齢、年が経つとなんとなく出てくるもね。性格じゃなくて、顔。顔はやっぱり普通の人とは違う」（老年女性）、「1番目の子どもはわからないけれど、2番目3番目になったら、はっきり。どっちかにふられるらしい」（老年女性）といった発言が聞かれる。「子ども1人しかつくらなかった。…どっちかにいくかわからないから」（老年女性）といったケースもあったという。しかしながら、実際のところ、アイヌの血筋を避けて結婚相手を探すことは可能なのか。この点については、難しいというのが正直なところであろう。和人とアイヌの血をひく人々はすでに多くおり、一見してアイヌとはわかりにくい人々も現れているからである。しかし、地元で生まれ育った者としては見分けることができる（「私はこういう土地で生まれたので、日高管内で生まれたからわかるけど」（壮年女性））。そして、わからなければわからないまま結婚できるけれども、わかってしまう以上避けようとする気持ちがなくならず、そのことに囚われてしまうというジレンマを抱えるのである。

そして3点目は、アイヌの人々の同化願望が指摘されていることである。この同化願望については、「静内では、私の印象としては、アイヌの方々は、今は、本物でない方が多くなりつつあり、シャモ（和人）と結婚している人が多いです」（壮年女性）という言葉があり、その他、アイヌ系住民である老年男性も「アイヌ民族は内心同化願望をもっている。民族としての誇りをどこにもっているのかな…と思う。アイヌの女性はシャモと結婚するのが願ひ。アイヌの男性も同じで、同化願望があり、同化する傾向にある」との言葉を残している。ここでは同化願望という語の定義は示されていないが、アイヌの人々の歴史を考えるならば、和人との結婚によって少しでも安定した居場所（差別や差別の構造がもたらす様々な生きづらさのない居場所）を得たいという願ひだと理解することができる。アイヌの人々の

側にこうした考え方を認めるならば、和人住民としては防衛的な心情に傾くことも考えられる。

なお、アイヌ系住民（老年男性3人）の妻はいずれも和人であるが、その妻との結婚に際して自分のアイヌ性が問題になったことはなく、娘の結婚に際しても問題になることはなかったと回答している。しかし、「妻にアイヌであることは話したが、何も言われなかった。…妻の親からは何も反対はなかった。…次女が結婚する時に向こうの両親から何か言われるようなことはなかった」という表現をみると、結婚におけるアイヌ性とは、そのことにむやみにふれることなく、「反対しない」という形で承認されてきたものであって、今もまだそういうものであることがわかる。「反対しない」という承認態度の背後には上記のような本音があったということも考えられる。結婚が継続される限り本音が聞かれる機会は少ないだけで、和人とアイヌの結婚をめぐってはつねに複雑な思いが取り巻いていることはたしかといえよう。

以上、和人とアイヌのカップルへの眼差しをめぐっては、「特別視せず普通に付き合う」「結婚はしない・させない」という二重の態度が存在することが示された。理屈、理念、理想としては、当事者の結婚意志を尊重すべきとしながらも、現実問題としてはアイヌの人々との結婚に対して前向きとはいえない態度である。その理由は3点にまとめられる。1点目は、差別が現実存在すること。2点目は、アイヌとわかる容貌の子どもが誕生する可能性が心配されていること。3つ目は、アイヌの人々の側の同化願望に対する反応である。これは自身あるいは子・孫の結婚というきわめてプライベートな問題であることから、その回答も建前と本音が混在する複雑な思いが込められたものになっているといえるだろう⁴⁾。

表6-38 結婚に際しての民族性の考慮の有無（自分や家族について、あるいは一般論として）

		●は和人住民 ■はアイヌ系住民
青年	男性	●全然気にしないですね。
壮年	男性	●（結婚時に和人かアイヌかを気にしたことは）それは別にありませんでしたね。 ●いや。死んだ親父よく言っていたな。アイヌの女の人のことをメノコというのだけれど、死んだ親父に「メノコでもいいから再婚するように」と言われた。メノコでもいいから、差別的なことだよな。心の中で冗談じゃないよと言っていたね。すごい差別しているね。潜在的だね。それは。さっきの設問で仲良くしていましたというけれど、普通仲いいけど、別に俺のなかでは、アイヌだから差別したり、いじめたりした記憶はないけれど、あったかもしれないけど、わからないけどさ、記憶にないから。潜在的に別な人というのはあったから、だから、親爺にそう言われても潜在的に冗談じゃないと心の中で蔑視してると思うんだよね。…アイヌの女性が、この子良い子なのになかなか貰い手ないね、かわいそうだよなというのはあったよね。そういう人はやっぱり本州出身の人と結婚するね。
	女性	●わからないね。相手がアイヌかどうか知らない人がいるんだよ。私はこういう土地で生まれたので、日高管内で生まれたからわかるけど。○○辺りで全然わからないでごく自然に恋愛して結婚して。～の○○だって、奥さんアイヌなんだけど。本人に「今度アイヌの調査来るんだ」と話したんだけど、言っているのかなと、その人もけっこう嫌がっていたの。やっぱり差別されていたから。こんなこと言っているのかなと思ったんだけど。その旦那さんの○○という人は普通の人なんだけど、奥さんがアイヌの民族だったの。普通に恋愛してちゃんとやっている。だから、わからない人はわからない。何も気にしない人は気にしない。 ●母は私達にお友達を連れて行っても何も言わなかったけど、結婚する時にはちょっと考えてと言われた。母ってあまり差別のない人だから、そういうことを言わない人なんですけれども、それはちょっと言われましたね。多分いろいろ差別されていたり、見ているんじゃないでしょうかね。（娘の結婚については）私は別に多分、親は見させてもらいますけど、それは誰を連れてきても多分同じだと思います。でも、そんなんでは。うち、夫もおまえが連れて来た人ならだれでもいいというほうなので。私達がだめだと言っても、多分好きなら一緒になるし、それでもって反対した後に、お父さんとお母さんが反対したから、私達こうなった、別れるとか別れないとか言われるようになった時にそう言ったと言われるのもいやだし。選ぶのは娘だと思っているし。そういう意味では誰を連れてきても。でも相手の親はちゃんと見せていただきます。
老年	男性	■20歳（昭和28年）の時に妻とは人に紹介されて結婚した。妻の両親がどう考えていたかわからないが、妻は○○に叔父さんがいて、○○のアイヌコタンに何回も行ったことがあり、アイヌのことを若い時から見ていたので、自分がアイヌであることはわかったけれど、気にしていなかったと思う。

	●○○にいる時からアイヌについては知っていた。結婚する時にアイヌかどうかは気にしていた。アイヌとはやばいな、結婚してはいけないという気持ちはあった。でもつきあったことはある。ものすごくきれいな人だった。アイヌはきれいな人が多い。全然わからない。あれ、と思うくらいきれい。アイヌかなとは思えない人だった。アイヌの人と結婚しようとは思わなかった。…アイヌの人に関しては友達だったら全然気にしない。別に何ということもないし一緒に遊んでいても違和感はない。…結婚だけは。親も結婚はアイヌはやめたほうがいいんじゃないかなと言ったかもしれないし、言ってないかな…はっきりしていない。でも俺自身が結婚しようとは思わなかった。知らないでつきあっていたら一緒になったかもしれないけれど。見た目アイヌという感じの人と結婚しようとは間違っても一緒になろうとは思わなかった。友達付き合いはいますよ。…見た目で気にする。よくアイヌはきたないという人がいる。根性がきたない、ひねくれているという人がいるが、でも俺の友達ではそういう人はいなかった。相手も人を見るしね。…娘がアイヌの友達を連れてきててもなんとも思わないが、結婚すると言ったらちょっと待ってくれやとなる。娘は離婚したが、離婚した相手の兄弟がアイヌと結婚している。別れていなければ親戚になるよね。むこうで親は反対したらしい。それは気にはなるけれど、でも一緒になったら仕方ないね。今からうちの娘が再婚すると言って、見た目が100%アイヌだとわかったら、「ここから出て行きなさい」と言うだろうね。見た目にあんまりわからないようだったらいいけどね。だからその人がハーフやクォーターだったら許せるけどね。両親がアイヌだったらやっぱりやめておけと言うだろうね。 ■恋愛や結婚をする時に民族性について特に考慮したことはなく、お嫁さんに来てくれれば誰でもいいと思っていた。母親もそういう考えだった。結婚する前に妻にアイヌであることは話したが、何も言われなかった。妻の親からは、妻が若かったので少し抵抗はあったが、自分がアイヌであることについて何も反対はなかった。…次女が結婚する時に相手にアイヌの血を引いていることを話したかどうかは知らないが、向こうの両親から何か言われるようなことはなかった。 ●親は感じるかもわからない、本人同士はいんじゃないですか。僕の知っている範囲でも親が反対しているから別に暮らしているという人はいますけどね。どっちかという男の方がアイヌで嫁さんが日本人というのが多いんじゃないですか。今はほとんど同化してきているから、ちょっとわからないね。アイヌの血が混じっているかどうかわからないね。見ただけではね。 ■結婚についてはアイヌ民族かどうかということで気にすることはなかった。妻は○○で生れ、戦争中に疎開して○○に来た。…アイヌ民族は内心同化願望を持っている。民族としての誇りをどこに持っているのかな…と思う。アイヌの女性はシャモと結婚するのが願い。アイヌの男性も同じで、同化願望があり、同化する傾向にある。 ●アイヌの人みんなシャモの奥さんもうんだよ。シャモの人でもらっている人もいるけど。男も女もそうかもしれないけど、アイヌの人はシャモの人にくっついたんだわ。どうしてなのかな。俺の弟だってね。弟の嫁さんアイヌなんだよ。もうくっつきたくて、みんなそれは駄目だと言うわな。反対というよりも、そんなの誰も相手にしなかったわな。知らない間にそうやって、くっついてしまっているから。もちろん、そういう結婚式挙げるわけでもないし。俺らもあんまりわからなかったけど。アイヌの人って、しつこくね、やっぱりシャモの人がいいのか、しつこく来て来て、そして一緒にあったんでないか。俺はあんまりわからないけど、聞きもしないけど。(弟の妻について) くっついたもの。アイヌだからって差別していないよ。普通に。むこうもアイヌのこと言うけど、俺らそういうこと口に出せないしさ。お酒を飲んでいても自分でアイヌのことを言うよ。それを何もどうだとかこうだとか誰も言わないし。昔はそんなこと考えられなかったけどね。昔はアイヌの人が自分でアイヌだと言ったら大変なことになったよ。そんなこと少しでもシャモの人がいたら大変ことになるよ。今はもうたいしてアイヌってね。あんまり今は差別ないんじゃない。 ●特別ないすね ●私はやっぱり、民族が違うからとか、そういう考え方は毛頭ございません。(好きになった人がアイヌかどうかは全く気にしない?) そうですね。(遊ぶお友達はいましたけど。また、そちらの方もそちらの人と一緒にいる方が多かったですね。…妻) ●前にアイヌの人が食事を作って、学校の給食を作ってくれて、その時に「長男がアイヌの人が好きだったら、お嫁にもらうか」と聞かれて「それでいいと思うよ」とその時言ったんだけどね。今はアイヌだから結婚しないとか、そういうことは問題にならないと思うんだけど。朝鮮の人、中国の人。要するに東南アジアの有色人種の人がずいぶん日本に来て、結婚する時代になっているでしょ。僕らが子どもの頃過ごした時と全く違う。自分の息子や娘が誰を連れてきてもいいと思うね。いいと言ったと思うね。そうでないと自分の中で矛盾してどうもならないね。
女性	●やっぱり、私はそれまで結婚とかそういう考えていなかったですけどね。いや、よく「こうなんだ。つきあっている人がこういう人なんだけど、なんぼ反対してもね」というのは聞きましたけれど、でも「今の時代はね」と言う「いや、そうじゃないよ。いつか必ず出るはずだ。」という話によく聞きましたけどね。でももうこの10年くらいはそういう話はないですよな。民族も何もそれが普通だと思って。(自身の結婚について) いや、それまで考えていなかったですよな。 ●やっぱり、一緒にはさせたくないね。子ども。子どもは結婚しているから、孫だね。あのね、やっぱり見ているとだんだん出てくるんだよね。年齢とともに、小さい時は全然かわらないかな、可愛いなと思っていても、その人が結婚したとか、年齢、年が経つとなんとなく出てくるもね。性格じゃなくて、顔。顔はやっぱり普通の人とは違う。でもね、最近私はそういう人達と交流もあって、性格はいいよ。お母さんたちはいいよ。その、子供さ。だから、これから子どもたちはもう結婚しているけれど。孫がもしアイヌの人を連れてきててもどうだろうね。一緒にさせるかな…ちょっと悩むかな。私もうだいが昔から見ているからね。けっこう交流もあって。やっぱり結婚となったら。普通の交際とかは全然関係ないよ。だけど、結婚となったらちょっと考える。…親のほうを見れば、ああやっぱりなと思って。やっぱり、アイヌ同士で結婚しているのではないから、こうね。薄くなって、若い時ならきれいに見えるからさ。1世、2世になってやっぱり純シャモ? でないからね。 ●うちの親戚のなかではないと思いますね。昔、○○で仕事をしていた時に同僚だった女性なんですけど、その人は○○の出身なんですよね。地元のアイヌの方とおつきあいして、今結婚しているんですけども、その事については、職場一同で大問題になりました。30年くらい前でしたが、私はなぜこんなに反対するのかがよくわからなかったんですけど、職場自体はその女性の両親を呼んで説得したりとか、私から、結局、潜在的にそういう差別があるということなんです。表面上は何も言わなくても、仕事の差別とか生活的な差別とか潜在的にあると思いますね。その時は本当にびっくりしましたね。 ●偏見でみるということはないよね。私達より上の人は結婚する時にはちょっと言う人はいましたけれども。今はそんなに。何もないね。うちら和人でしょ、だから、両方の親は何も言わなかったし。私の親もちょっと変わっていると言えば変わっているかもしれないけど、1人だけは外国人と結婚しているのがいるから。兄弟の1人が外国人と結婚しているから。外国に今住んでいますけど、だからって反対はしていないから。誰を選ぶというのもそんなに反対しなかったと思いますね。…(俺らの友達で、いたんだ。だけどその人もアイヌと思わないで結婚しているけれど、子ども1人しかつくらなかった。男の子は何ぼか見れば、(アイヌ) かなってわかるけど。したから、どっかにかいくかわからないから。1番目の子どもはわからないけれど、2番目3番目になったら、はっきり。どっかにかふられるらしい。…夫)

第6節 交流と「共通なるものとしての差異を承認すること」

以上、住民とアイヌの人々との交流のありようをみてきた。上の世代ほどアイヌに関する「記憶」が多いなかで多くの交流をもち、異質な存在との思いや好悪の感情が鮮やかであるのに対して、世代が若くなるとアイヌに関する「学び」が増える一方で交流は低調で、アイヌの人々への強い感情を必ずしももつわけではない、という状況がある。そして、そうした状況において展開される交流とは、「特別視せず普通に付き合う」一方で、「結婚相手としては否定する」という二重の態度に支えられたものであった。

最後に、必要なアイヌ政策を問うた回答結果、すなわち、今後に向けてのアイヌの人々へのスタンスと、アイヌの人々との交流の関わりについて考える。まず、必要なアイヌ施策についての考え方をみると、正しい理解の提供や特別の施策を不要とする考え方については、交流頻度の高低にかかわらず一定の賛同者がいる。しかし、人権尊重の社会の必要性は交流が多い者においてより多く選択される。雇用対策・経済的援助・教育支援など財源が必要なものについても、交流が多いほど必要性が理解されている。交流が相対的に多ければ、差別的状況を見聞きする機会も相対的に増え、支援の必要性への理解が深まるためと思われる（表6-39）。したがって、世代別にみると、老年層（すなわち、交流が相対的に多い年代）においてのみ、これらの項目が選択される比率が高めである（表6-40）。このように、アイヌの人々との交流は彼らが置かれている状況と必要な支援を理解するという意味で一定の意味があるといえる。

しかし、むしろ注目すべきは、「理念として、人権尊重と文化保存と正しい理解の必要には賛成するが、実際に特別扱いすることには反対」という考え方が世代の共通理解としてあることである。そして、アイヌ文化を後世に残す際の主導権のありかについては、アイヌ自身や地域に委ねようとする考え方が年代が下がるほど増えていく（表6-41）。つまり、ここから引き出せるのは、文化も人権も主導権も尊重するという態度が主流になりつつあること、その態度は今後さらに強調されるようになるだろうということである。

彼らのこうしたスタンスには、スコットの「何かを共有することで成り立つ普遍化すなわち同化を求めるのではなく、個々人に共通なるものとしての差異を承認する」という視点がみられるようにも思われる（スコット 2012）。これは、社会においてこの種の問題が注目され、さかんに議論されるようになり、国際法上でも先住民の権利が認められるようになってきたという世界的な流れのもとにあるものといえよう。学校教育において先住民について学ぶ機会が増えたことや教育水準の上昇（とくに若い世代については）、メディアの発達などが有効に働いた結果と考えられる。アイヌの人々の人権が尊重されず差別が色濃く存在していた時代に比較すれば、よい傾向であることは間違いない。

しかし、アイヌの人々との交流を考えると、この現況を無条件に是と判断してもよいのかという疑問も同時に生じる。すなわち、「差異を認めること」が、結果として、2つの事態を引き起こすと考えられ、現にそれを思わせるような発言が聞かれるからである。

1点目は、「差異を認めること」がアイヌの人々への関心を弱め、無関心を浸透させ、表面的な交流が主流となることである。もし、同化を必然と考えるならば、同化の対象として、あるいは同化を拒む・同化ができない者を排除の対象として、いずれにしても、アイヌの人々に対して強い関心を抱かざるをえないだろう。これに対して、「差異を認める」という表現は、理念としては、人権尊重・権利回復に向けての積極的な動きをも含めたイメージをまとうものであるが、現実における「差異を

認める」とは、現状を放置する・無視することを容認することにつながる場合も考えられる。「アイヌがこういうことをしたらいいとかとくに何にも思わない。アイヌの人がどうのこうのとかそういうことに関してはいっさい何も思いません」(老年男性)、「(政策について思うことは) いやいや、全然ないです。変わるということもないから。そんなに興味ないから。あんまり考えたことないから」(老年女性)といった発言がある。あるいは、すでに必要な同化が完了しているという理解のもとに、もうこのへんでよいのではないかという意味で同化を求めなくなるだけ、という場合もある。後者はある種の達成感をともなうものであり、インタビューにおいても「すっかり同化している」といった内容の発言が複数聞かれている。「同化政策は完成したとは言わないけれど、成功しているじゃないですか」(壮年男性)といった発言が端的なものである。無関心が民族の自主自立という原則によって「正当化」されるということならば、そこで展開される交流の質もそれを映したものにならざるをえないだろう。

2点目は、1点目とも関わることであるが、「差異を認めること」が「無関心」につながり、そのことがアイヌの人々に対する無自覚の優位意識を固定化することである。つまり、アイヌ問題について無関心であることは、和人とアイヌとの交流をフラットなものとして考えることを必ずしも意味しない。さらにいえば、自分の考え方のなかにこうした優位意識があるかもしれないことに自ら気づくチャンスを失うことである。たとえば、インタビューにおいては、アイヌの人々が和人との結婚を望んでいるという発言がたびたび聞かれるが、先に指摘したように、そこには、和人優位の意識があることは否定できない。この他にも、アイヌの人々との関係を語る言葉には、無自覚ながら和人を上に置く（置いてしまう）ものがみられる。一例として、「日本の場合はアイヌに対して「この野郎」と言う人はいないでしょ。むこうはインディアンを一番下に見ているでしょ。白人、黒人、インディアンだから。こっちはそんなことないでしょ。シャモが上でアイヌが下というふうに思う人はいないと思う。シャモが上でヘカチが下だということないでしょ。だからみんな一緒だから別に一緒にやりなさいということで。ヘカチと言ったら怒られるもね。…差別的なものはもう今ないんじゃないかと思うけどね」(老年男性)といった言い方がある。これが差別の自覚なく発言されているとしても、対等であること・尊重することとの隔たりを感じさせる言葉である。無自覚・無頓着な優位意識がある限り、「特別視せず普通に付き合う」一方で「結婚相手としては否定する」という交流態度は残っていくと思われる。

アイヌの系統の住民が望む施策とは人権尊重（70.6%）に加えての雇用対策（35.3%）、教育支援（29.4%）、経済的援助（17.6%）、補償（17.6%）であり、主導権というよりは既得権の方に関心があるように思われる（表6-42）。これは住民全体の意識の傾向とは大きく異なるものである。今後、アイヌと和人の混血がいつそう進んでいくなかで、住民vsアイヌの人々という単純な構図で交流を語ることが難しくなるだろう。交流がどのような表現で語られるとき、その内実は両者にとってよりよいものになっているのだろうか。「すべての人に共通なるものこそ差異である」という感覚が本来の意味で浸透し、その感覚が無関心や無自覚の序列意識（場合によっては、序列意識があるからこそその成功者への嫌悪）につながらないようにしていくにはどうすればよいのだろうか。交流を考えるうえで重要な課題である。

表6-39 アイヌの人々との交流×アイヌ施策（複数回答）

	度数（応答者数％）									合計 （合計数の％）
	人権尊重	アイヌ語	雇用対策	教育支援	経済的援助	補償	正しい理解	不要	その他	
よくある	81(63.8)	47(37.0)	19(15.0)	19(15.0)	13(10.2)	14(11.0)	47(37.0)	43(33.9)	16(12.6)	127(25.7)
たまにある	90(59.2)	65(42.8)	15(9.9)	16(10.5)	10(6.6)	16(10.5)	69(45.4)	64(42.1)	10(6.6)	152(30.8)
あまりない	41(47.7)	35(40.7)	3(3.5)	7(8.1)	2(2.3)	6(7.0)	37(43.0)	31(36.0)	6(7.0)	86(17.4)
ほとんどない	61(47.3)	45(34.9)	13(10.1)	8(6.2)	8(6.2)	8(6.2)	54(41.9)	46(35.7)	11(8.5)	129(26.1)
合計	273(55.3)	192(38.9)	50(10.1)	50(10.1)	33(6.7)	44(8.9)	207(41.9)	184(37.2)	43(8.7)	494(100.0)

表6-40 施策（複数回答）

	度数（応答者数％）									合計 （合計数の％）
	人権尊重	アイヌ語	雇用対策	教育支援	経済的援助	補償	正しい理解	不要	その他	
青年	37(42.5)	28(32.2)	6(6.9)	6(6.9)	6(6.9)	9(10.3)	43(49.4)	29(33.3)	12(13.8)	87(17.2)
壮年	91(48.7)	70(37.4)	12(6.4)	10(5.3)	8(4.3)	11(5.9)	76(40.6)	79(42.2)	15(8.0)	187(40.0)
老年	151(65.1)	97(51.8)	33(14.2)	35(15.1)	20(8.6)	26(11.2)	94(40.5)	80(34.5)	18(7.8)	232(45.8)
合計	279(55.1)	195(38.5)	51(10.1)	51(10.1)	34(6.7)	46(9.1)	213(42.1)	188(37.2)	45(8.9)	506(100.0)

表6-41 アイヌの歴史や文化の残し方

	度数（％）				合計
	アイヌ自身で	日本の国で	地域毎に	その他	
青年	25(29.4)	22(25.9)	30(35.3)	8(9.4)	85(100.0)
壮年	47(25.8)	67(36.8)	59(32.4)	9(4.9)	182(100.0)
老年	49(22.7)	101(46.8)	58(26.9)	8(3.7)	216(100.0)
合計	121(25.1)	190(39.3)	147(30.4)	25(5.2)	483(100.0)

P<.05

表6-42 アイヌ施策（複数回答）（アイヌ性別）

	度数（応答者数％）									合計 （合計数の％）
	人権尊重	アイヌ語	雇用対策	教育支援	経済的援助	補償	正しい理解	不要	その他	
和人	267(54.5)	191(39.0)	45(9.2)	46(9.4)	31(6.3)	43(8.8)	209(42.7)	182(37.1)	42(8.6)	490(100.0)
アイヌ	12(70.6)	5(29.4)	6(35.3)	5(29.4)	3(17.6)	3(17.6)	6(35.3)	2(11.8)	2(11.8)	17(100.0)
和人妻	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
和人養子	2(100.0)	1(50.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(50.0)	1(50.0)	2(100.0)

第7節 おわりに

この地における住民とアイヌの人々との交流においては、一般社会からの（外界からの）眼差し、同じ地域に暮らす者としての眼差し、加えては、血筋がもたらす眼差し、という3つの眼差しの混交や交錯がみられる。個々の地域住民は、自身のもつ多様な条件に規定されながら、これらのバランスを時々の状況に合わせてアレンジし、自身の立ち位置をつねに調整しつづけなければならない。そして、その調整の結果得られる立ち位置は、世代によってどんどん変容していく。

しかしながら、アイヌの人々との、よりオープンで自由に屈託のない交流が展開されるとしても、その奥底には無関心や和人優位という意識の種が潜んでいる可能性を我々は忘れてはならないだろう。

注

1) 近所の人との交流については、「道で挨拶」「世間話」など具体的な選択肢が提示されているのに対

して、アイヌの人々との交流については、「よくある」「たまにある」というような主観的なものさしでその頻度をたずねており、何をしたら交流頻度が高いことになるのかについては個々の判断に委ねられている。「交流」という語から何がイメージされるのかは世代によって異なることも考えられるため、この点についてはさらに探る必要があろう。

- 2)インタビュー中、アイヌ系住民はいずれも近所付き合いに関する発言をとくにしていない。
- 3)アイヌ文化を体験しながらの交流としては、熊猟の後に誘われて一緒に酒を飲んだこと（壮年男性）、シャクシャイン祭りで炭火焼のアキアジを買い、アイヌの儀式を見たこと（老年女性）、展示会に行つてアイヌ刺繍を体験したこと（老年女性）などがあげられている（表6－43）。その体験については、アイヌの人々と回し飲みをした壮年男性は「初めての時はやっぱり凄いなと思いましたね。凄いとしか思いませんでしたよ」と感想を述べ、シャクシャイン祭りに出かけた老年女性の夫は「静内の曾長と、阿寒とか向こうの曾長みたいのとか、そういう人が来るんだ。かなりの人だよ。始まった時だったら。アイヌの人ばかり。アイヌはやっぱりな、話の種にもなるし、若いうちから1回くらいは見といてもためになることだと思うよ」と語る。その語り口をみる限り、一回性の異文化体験の思い出として記憶されるにとどまるものも多いように思われる。
- 4)自身のなかにある二重性に気付いたという例もごくわずかながらある。離別経験のある壮年男性は、父親から「メノコでもいいから再婚するように」と言われたときの自分の反応を思い出し、「心の中で冗談じゃないよと言っていたね。すごい差別しているね。潜在的だな。それは。さっきの設問で仲良くしてましたというけれど、普通仲いいけど、別に俺のなかでは、アイヌだから差別したり、いじめたりした記憶はないけれど、あったかもしれないけど、わからないけどさ、記憶にないから。潜在的に別な人というのはあったから、だから、親爺にそう言われても潜在的に冗談じゃないと心の中で蔑視してると思うんだよね」と語っている。

表6－43 アイヌ文化についての知識・体験・体験希望

		●は和人住民 ■はアイヌ系住民
壮年	男性	●ここにいたら、そういうふうにアイヌの人達が熊獲ったから、酒飲みに来ないかと誘われて、その時に初めて、そういうアイヌ文化を知るようになった。15年くらい経つかな。熊の頭の毛を剃って、脳みそを出して、窓にかけて、これが本当のあれなのかなと思いながら、みんなで回し飲みして、一応それなりにちゃんとお祈りする人もいましたんでね。初めての時はやっぱり凄いなと思いましたね。凄いとしか思いませんでしたよ。（やってみたいことは）これっていつて。いろいろ、静内で鮭漁を見たことがないんだよね。舟を下ろすのは何回も見てるんだけど。鮭漁はやってたことはあると思うんだけど、見たことがない。 ●初めて接したのは30数年前で、その時にもうこの地域にいるアイヌの人達とはまったく別な世界と思ったから。昔の伝統芸能とかを守るために日々、このシャクシャイン祭りの前にこの人達訓練、練習してやっているんだというふうにしかなかった。（参加してみたいものはない？）そうですね。
	女性	●あの刺し子はすごいしたいです。ユーカラ織はちょっとできないかな。やっている教室みたいところに連れて行ってもらったから。アイヌの人達に教えている講座に連れて行ってもらったんです。それは募集しているんじゃないかって、その伝承するために若い人に教えているところをちょっと見学させてもらったんですけど、その時は教えてもらえなかったから。すごい忍耐とか、けっこう厚いものだから、すごい大変な作業なんですよね。すごいやりたいと思っています。
老年	男性	■普段実践している、あるいは心がけているアイヌ文化については、日常的ということになると、アイヌというよりは、一地域住民として、人間という立場に立つとみんな同じだと思っている。アイヌというよりは人間としての道を踏み外さないことが大事。…関わってみたいアイヌ文化については、夢見も特に大事にしているわけでもない。人に特にアイヌ文化を説明したりすることは考えていない。 ■普段実践している、あるいは心がけているアイヌ文化は、親から教えられてきていないのでとくにない。料理など、小さい頃に見たことがあるのはいろいろある。アイヌ協会の催しでも見たことがあるものはある。協会でやっているのを暇があれば見に行く程度で、実践している文化はない。自分はこの歳でアイヌ文化をやっていないから、今の若い人でやりたいとか、やっているのは偉いと思う。自分は小さい頃の差別が根にあって消えない。だから、ある意味、そこまで関われるか（関われない）という思いがある。

	■イチャルパは参加したことはある。イナウは知っている。アイヌ語も知っている。歌や踊りも知っている。体験したいという気持ちはない。仕事で教育委員会に入って社会教育に関わっていた。自分はそれまでアイヌの歌や踊りなど組織化されていなくて、芸能などの催しの時に参加する機会がなかったものを、参加してもらうようにした。アイヌの保存会の立ち上げにかかわった。1971（昭和46）年頃だった。 温泉が出来た時に、温泉祭りで踊りなどをする芸能発表会があり、自分は〇〇をやったことがあった。そのお祭りの時にアイヌの歌や踊りを入れるようにした。蓬萊山祭りにもアイヌの歌や踊りを入れた。それまでは公的行事にアイヌ文化を入れたことはなかったと思う。 ●アイヌの人は鮭いっぱい、ほとんど無駄なく使う。僕は、たとえば内臓は捨てると思ったらおかしいですけど、アイヌの人がたは余すところなく全部食べる。料理になんでも使う。そういう面では今でいう、技術が発達して、冷蔵庫とかが発達してきていますから。保管は冷蔵庫ですとか。その当時の人は技術がないから塩引きにしたり、干して取っておくとか。いらぬ物いっさいないというそういう生活ですね。今の日本で一網打尽に何でもとって冷蔵庫に貯めておく、年がら年中。アイヌは1いるのなら、1しか取らない。鹿でも熊でも何でも、必要なものを必要なだけしか獲らないから、再生産もできたし。それが、日本人が来て物々交換して。アイヌ勘定があるでしょ。始まりに、真ん中に、終わり、10が13くらいになる。問題は、言葉があるけど文字はないから、そういうのが伝承ができないというのが致命傷だと思うね。 ●（カムイノミに）お付き合いの関係から、誘われて参加させていただきました。アイヌの方々も自分たちのことについて、詳しい人、またお付き合いのなかでそういう人と一緒に、というあれはございますね。要するにウタリという感覚がございます。親しい人、和人であっても。私自体も北海道にこうやって住んでいるわけですから。アイヌモシリ、これは尊重しなきゃならないし、そういう観点から接しているもんですから、やっぱりそれなりのあれはしてくれませうね。シャモにしておくのもったいないと言われるくらいですから。（将来も）まだまだ勉強してみたいと思います。ある程度、資料を持っていますね。カムイユカラなどアイヌの人にお貸していますね。また、そのうちに戻してもらおうと思っていますけど。
女性	●（アイヌ文化といわれても）内容は全然わからない。アイヌ文化についてこの辺は全然なかったもので、わからないですよ。〇〇の〇〇あたりでそういう（田植えや稲刈りの時に祈る）儀式をするような話は聞いたんですけど、〇〇あたりではそういう人は多かったけれど、もう儀式はなかったですね。何かあったら〇〇のほうに行っていたのではないのでしょうか。…将来参加したいというのもわからないですね。何年か前にここ〇〇というところにもアイヌが多いんですよ。亡くなった時に土葬にするのに、そんなにお付き合いはなかったですけど、やっぱりこう見ていたら何日もなんかやっていて、うちのここに見える所に町の許可をもらって土葬にしましたけれどね。その人はアイヌの人でも偉い人だったみたい。2、3年したら柵取ってしまいましたけどね。「あ、いつも～のじいが見えるわ。」と言いながらね。そこの玄關出たら墓地が見えるんですよ。ここから、ちゃんと土葬にした時はきっちり柵があって、見えるんですよ。この辺では有名な人。 ●シャクシャイン祭りでアキアジを炭火で焼くんですよ。串に刺して、焼くの。おいしそうでしょ。それを買いにいったのね。町の祭りとはまた別で。シャクシャインって、そこの山になっているんだよね。そこで、やるんだけど、おもにアイヌの人が集まって。アイヌの人の儀式だよ。〈だから静内の酋長と、阿寒とか向こうの酋長みたいのとか、そういう人が来るんだ。かなりの人だよ。始まった時だったら。アイヌの人ばかり。アイヌはやっぱりな、話の種にもなるし、若いうちから1回くらいは見といてためになることだと思うよ。：夫〉 ●町のなかで、ちょっとした時にあるのね、そういうの。展示会があって。行ったときにやってみるというような感覚で。時間がある時に、たまたま寄ったら、そういうことをやっていたということで。独特な刺繍ですよ。あれは、さしていくのも。それくらいかな。やっているのは独特だなと思って。あとあのムックリは音を出すのが大変ですよ。…いろいろなことをただちょっとやってみただけ。おもしろいかな。のちのち、まだ全然そういうことは出来ないけれど、暇になって、何か出来ればということぐらいかな。

参考文献

Scott, J. W., 2007, *The Politics of the Veil* (Princeton University Press). 李孝徳訳, 2012, 『ヴェールの政治学』 みすず書房.

(小野寺理佳)